

# 第26回 毎日俳句大賞

一般の部

郵送・インターネット・点字応募 / 予選通過作品

## 1637 句

予選番号（0020 / 0055 / 0886）の3作品は  
先行句判明のため、予選通過を取り消しました。

- \* 予選通過句を、全56ページで公開いたします。
- \* 本選者は、この中より【特選1句・秀逸2句・佳作40句】を選出します。
- \* 読者賞へのご応募には、この中から「3句」を選び、投票フォームからご送信ください。
- \* 他の紙誌や俳句大会などへの二重投稿、また、盗作・類似作をはじめ、先行句が明らかになった場合は、その都度、予選通過句のページ内で、取り消しを明記していきます。
- \* 類句などに関するお問い合わせや質問は、お問い合わせフォームからお送りください。

0 0 0 1  
0 0 0 2  
0 0 0 3  
0 0 0 4  
0 0 0 5  
0 0 0 6  
0 0 0 7  
0 0 0 8  
0 0 0 9  
0 0 1 0  
0 0 1 1  
0 0 1 2  
0 0 1 3  
0 0 1 4  
0 0 1 5  
0 0 1 6  
0 0 1 7  
0 0 1 8  
0 0 1 9  
0 0 2 0  
0 0 2 1  
0 0 2 2  
0 0 2 3  
0 0 2 4  
0 0 2 5  
0 0 2 6  
0 0 2 7  
0 0 2 8  
0 0 2 9  
0 0 3 0

遠雷や外せしままの銀指輪  
桜花あつめて空へ返す子ら  
凍星やいのちの選択ゆだねらる  
語り部の子も語り部に梯梧燃ゆ  
ゲーム好きコロツケ好きの鉾の稚児  
黒き貨車炎天の野へ驀進す  
永き日やプールの河馬の大欠伸  
通販の刻み過ぎたる鰻かな  
亡き父母の声近くあり墓洗う  
ままごとでつながる社会ボク店長  
秋立つやジーンズの老いきいきと  
秋暑しボクサーとして人をうつ  
ひたむきなヤングケアラー冬に入る  
地球儀を回し卒業して行く子  
好かれても捨てるだけです草蟲  
献血の子の逞しき日焼けかな  
海底に軍神眠る敗戦日  
扇風機逆回りさせ昭和見る  
栗の花触るる高さの回向柱  
先行句判明のため、予選通過を取り消しました  
青嵐舟こぐ男身を弓に  
理不尽を理不尽のまま蟻地獄  
メンソレータム蕩ける八月の海がある  
打たれ居る時の滝音とふ静寂  
石橋の苔の色艶滝飛沫  
その奥に守る命や草いきれ  
油照り喫茶の窓に吐く呪文  
どの墓も等しく照らす盆の月  
夢ひらくひと夜限りのサボテンよ  
帰省子をまたねと送り涙する

0 0 3 1  
0 0 3 2  
0 0 3 3  
0 0 3 4  
0 0 3 5  
0 0 3 6  
0 0 3 7  
0 0 3 8  
0 0 3 9  
0 0 4 0  
0 0 4 1  
0 0 4 2  
0 0 4 3  
0 0 4 4  
0 0 4 5  
0 0 4 6  
0 0 4 7  
0 0 4 8  
0 0 4 9  
0 0 5 0  
0 0 5 1  
0 0 5 2  
0 0 5 3  
0 0 5 4  
0 0 5 5  
0 0 5 6  
0 0 5 7  
0 0 5 8  
0 0 5 9  
0 0 6 0

百段を登れば海は秋の青  
廃村に残る札所や草いきれ  
石鎚の峰雲を背に凜として  
蓮池や蜻蛉幽雅に浮き沈み  
桜散り水面に花卉泳ぐかな  
万緑の岬に小さき渡し舟  
足先の遠さ恐ろし立泳ぎ  
昼寢覚雨足に聴く軍靴の音  
段持ちの米寿の一手日脚伸ぶ  
若葉風まだ生まれざる子等の声  
十字架は先より古りて麦の秋  
金魚田の隅の波立つ夜明けかな  
薪割りの音小気味良く冬支度  
閑散の居酒屋暖炉燃え盛る  
割箸と一期一会や楫を足す  
盂蘭盆やお墓の「写メ」に拝礼す  
廃車せし車庫に熟れたる葡萄かな  
打水のはじめの風のなまはんか  
少年少女いちじくの木に水着干す  
ブーゲンビリア神は沖からやつてくる  
弾薬庫深閑として鳶茂る  
笠踊待つ間も手うつ出羽の衆  
花冷の心に修羅を飼ひ慣す  
生くるとは少し酔ふこと花万朶  
先行句判明のため、予選通過を取り消しました  
透析の返血終えて藤の花  
誠実に美ら海埋めて慰霊の日  
青芝の広がる先や軍用機  
組織には属せず芋を植ゑにけり  
雪ん子に語りて母の笑顔かな

0090	0089	0088	0087	0086	0085	0084	0083	0082	0081	0080	0079	0078	0077	0076	0075	0074	0073	0072	0071	0070	0069	0068	0067	0066	0065	0064	0063	0062	0061
あめんぼう体重ほどの水ゑくぼ	悔い多く束ねてくべる焚火かな	新涼や発掘現場の洗濯機	緑陰はいのちを支度するところ	家の内神の座いくつ鏡餅	森はその闇をちぎって揚羽とす	昭和という長編だった凧よ	若鮎の岩陰ぬけて光得る	虹だよとズック突っかけ駆ける君	星涼し攻焚に入る登窯	作陶の手を休めをりほととぎす	うぐひすに陶房の窓開け放つ	うすらひを朝日にかざしみる子かな	どどどつと窯の火の粉の舞ふ寒夜	錦秋や修験道いまけものみち	渦なして風の起点の芒原	やまびこのふくらみ戻る青葉溪	しやぼん玉いびつに生れて丸く果つ	電線に風の音符や浅き春	万緑に飴ボルシェの加速音	全山のソーラーパネル大夕焼	猥褻なほどに大玉トマトかな	くちなはへ母国語浴びせ実習生	ひと塊ひとかたまりに秋の雲	妙見山にすぢ雲かかり秋立てる	荒南風や舵棒股の仁王立ち	すっぴんの腿たくましき冬の駅	玫瑰や重なり合ひて波無限	金盞花遠く海風吹き通ふ	直ぐ近く見えて遠しや山の秋

0 0 9 1  
0 0 9 2  
0 0 9 3  
0 0 9 4  
0 0 9 5  
0 0 9 6  
0 0 9 7  
0 0 9 8  
0 0 9 9  
0 1 0 0  
0 1 0 1  
0 1 0 2  
0 1 0 3  
0 1 0 4  
0 1 0 5  
0 1 0 6  
0 1 0 7  
0 1 0 8  
0 1 0 9  
0 1 1 0  
0 1 1 1  
0 1 1 2  
0 1 1 3  
0 1 1 4  
0 1 1 5  
0 1 1 6  
0 1 1 7  
0 1 1 8  
0 1 1 9  
0 1 2 0

初任地へ付き添ふ父の四月かな  
搬送のへり飛び立てり秋の声  
亡き母の後ろ姿か大花野  
霧襖開きて行者霧に入る  
黙々と分家総出の墓掃除  
筆嬉々としみも踊る吉書かな  
隼人瓜皮算用の六百個  
空近く歩荷に道を譲りおり  
特大の水鉄砲の命中す  
亡き夫の茶渋の湯呑み秋に入る  
誰にでも誕生日あり地蔵盆  
一献を手向けて父の墓洗う  
捨てきれぬ昭和の透る夏帽子  
櫓田の静かな雨に濡るる午下  
世に影のなく雪虫の過ぐ  
三匹は密かと思ふ金魚玉  
一杯の酒が薬や生身魂  
スナツプを利かす一瞬蠅叩き  
炉開きに予算値上げの材料費  
遠泳の海に抱かれてしまひけり  
満月や能登のいづこも波被き  
昼寝覚めかの世この世も違ひなし  
秋の夜の夫とチーズと赤ワイン  
原爆忌黙禱一分は短し  
早池峰を下りて遠野に結ぶ露  
アサギマダラ初咲きのダリアに口づけ  
あやめ咲く私の心の色で咲く  
熱帯夜底より声出すマンホール  
砂塵上げ早魃の地を象の群  
争いし矮鶏や秋日を蹴散らして

0 1 2 1  
0 1 2 2  
0 1 2 3  
0 1 2 4  
0 1 2 5  
0 1 2 6  
0 1 2 7  
0 1 2 8  
0 1 2 9  
0 1 3 0  
0 1 3 1  
0 1 3 2  
0 1 3 3  
0 1 3 4  
0 1 3 5  
0 1 3 6  
0 1 3 7  
0 1 3 8  
0 1 3 9  
0 1 4 0  
0 1 4 1  
0 1 4 2  
0 1 4 3  
0 1 4 4  
0 1 4 5  
0 1 4 6  
0 1 4 7  
0 1 4 8  
0 1 4 9  
0 1 5 0

遠嶺晴れ光る稲穂の照り翳り  
夏惜しむドラマチックに水平線  
飯盛山の洞穴深し虫時雨  
戸の隙にメモ挟みある西日かな  
碧空を鳶巡回す七五三  
土の香を白雨一氣に奪ひ去る  
刈田道稲の匂ひの懐しく  
二人乗りカヌー体験子等の声  
経蔵の屋根を叩くか石叩  
早稲の香や天へ天へと千枚田  
夕夏野猫背の魔女の通り過ぐ  
蘭鑄のチュチュを脱ぎたき仕草せり  
行く秋のドライブインに星の地図  
漕ぎ出づる海は鴉色春の暮  
二巻に足らぬ注連縄樟大樹  
車椅子降ろす停車場つくつくし  
門閉ぢて尖る三日月路地の奥  
掌の運命線へ独楽の軸  
寒暁に響く魚板や火の匂ふ  
頭からセーターを脱ぐけふを脱ぐ  
夕陽落ち百日紅と語る空  
下町は猫も住人秋刀魚焼く  
熊本の百花蜂蜜夏の朝  
玉葱の大小まぜて背負籠  
信楽のホームのたぬき月祭る  
紅木槿散り急がねばならぬかに  
秋の虹くぐりて届く京銘菓  
口下手の差し出す田芹みづみづし  
引鶴に海原かぎりなく蒼し  
風になりたくて水辺の蝶々かな

0180	0179	0178	0177	0176	0175	0174	0173	0172	0171	0170	0169	0168	0167	0166	0165	0164	0163	0162	0161	0160	0159	0158	0157	0156	0155	0154	0153	0152	0151
はたた神椎の櫓木を打ちに来る	柿すだれ分けて荷受の認印	紙一重二重としのぎ敬老日	氏素性問はぬものの芽庭三坪	がつしりと握る吊革初仕事	剣玉の膝やはらかき生身魂	千両をひと抱へして茶の師来る	海原に寝返りを打つ鯨かな	日向ぼこ地平線より戦車来る	やがて死ぬ人が死者積む原爆忌	夏芝居三面鏡に顔四つ	反核の署名にたたむ日傘かな	天帝のつまみ上げたる雲の峰	噴水の柱に風の凭れをり	果されぬ約束ありぬ萩の花	秋夕焼思はず訛る一人称	読みさして葉の足りぬ秋思かな	拾ひ来し栗も加へて栗ごはん	人恋ひの夏蝶とゆく水辺かな	木下闇五指の碎けし如来かな	喪ごもりの我に差し入れ桜餅	ヒマラヤ杉寡黙八月十五日	灯を消して波の音聞く夜の秋	月ひとつ太陽ひとつ麦青む	千枚が一枚となる青田波	春雷の一つ大きく村暮るる	稲光手首まである生命線	往診の医師のジーンズ麦の秋	退職の日の青空と蒲公英と	一晚の水のちからに稲の花

0 1 8 1  
0 1 8 2  
0 1 8 3  
0 1 8 4  
0 1 8 5  
0 1 8 6  
0 1 8 7  
0 1 8 8  
0 1 8 8  
0 1 8 9  
0 1 9 0  
0 1 9 1  
0 1 9 2  
0 1 9 3  
0 1 9 4  
0 1 9 5  
0 1 9 6  
0 1 9 7  
0 1 9 8  
0 1 9 9  
0 2 0 0  
0 2 0 1  
0 2 0 2  
0 2 0 3  
0 2 0 4  
0 2 0 5  
0 2 0 6  
0 2 0 7  
0 2 0 8  
0 2 0 9  
0 2 1 0

庭下駄のうかと遠出の探梅行  
五月雨の山路微かに葉の響き  
見上げればちくりと雪の舌触り  
落蟬に水筒の水もらえますか  
夕風の小石の肩に赤とんぼ  
落蟬や木の葉の影が柩なり  
夕立のほひが先に来たりけり  
葉桜や陽の斑と遊ぶ吾子の指  
槍ヶ岳より浄土へと秋日落つ  
リラの花髪でも切ってこようかしら  
畑灼くる孫の古靴ぶかぶかと  
丘道の暗がりに立つ蝮蛇草  
直角に保つ鎌首蝮蛇草  
刻々と暮れ行く秋や廃線路  
菖蒲園うきうきジャズのカルテット  
敵よりも味方恐ろしいねつるみ  
建機みなかうべを垂れて年暮るる  
小石載せ金魚の墓のまた一つ  
菓子少し余して小雨地蔵盆  
ゆるしをる犬の甘噛み終戦日  
風鈴や凧が休止符差し挟む  
縦横の踏板きしむ杜若  
露落ちて芋の葉もとに戻りけり  
踏切のバーの上がらぬ油照  
年の瀬や谷の底より風の音  
沖暗く越後村上鮭素干し  
敗戦日捌く魚の骨白し  
蝮には注意の朱書き仏坂  
凍土にて草むす屍大地這う  
生と死の谷間にありて星流る



0 2 4 0	0 2 3 9	0 2 3 8	0 2 3 7	0 2 3 6	0 2 3 5	0 2 3 4	0 2 3 3	0 2 3 2	0 2 3 1	0 2 3 0	0 2 2 9	0 2 2 8	0 2 2 7	0 2 2 6	0 2 2 5	0 2 2 4	0 2 2 3	0 2 2 2	0 2 2 1	0 2 2 0	0 2 1 9	0 2 1 8	0 2 1 7	0 2 1 6	0 2 1 5	0 2 1 4	0 2 1 3	0 2 1 2	0 2 1 1
大いなる縦掛ける横入道雲	新住まい月の匂いの花鋏	より深く被れ子の声風の盆	漁火に声絡み合う夜長かな	川底に赤い水筒広島忌	桑いちご空地に鞆まとめ置く	首から脱ぐ大蛇繕う端居かな	兜虫腕にも這わす露店かな	白魚に夜を使い切る大漁旗	新築の槌音高し燕去る	冥冥たる濃霧の中の東京湾	揺れ惑ふ茶毘のけむりは秋天へ	塵一つ無き初潮の引きし浜	次の世は毛虫になるな毛虫焼く	烏瓜お前も一人だつたのか	夏の雲阿蘇カルデラに盛り上がる	チューリップ崩れて戦火続くなり	時の鐘冬陽射しいるやぐらかな	眠たげな子もいて梅雨の日の登校	メジロの巣庭の帚を素材とす	温室にデスク置かれて農学部	炎昼やくさり食い込む象の脚	死してなほ隣人のあり墓洗ふ	大蛸の荒塩打たれ扱かるる	日の匂ひむんむん向日葵の迷路	あんべわりい時はすっかい心太	汗の手を「ヨシ」とベトナム実習生	月涼しギターひとつの反戦歌	暮るるほど饒舌となる桜かな	まだ父の匂ひ晩夏の腕時計

0 2 7 0	0 2 6 9	0 2 6 8	0 2 6 7	0 2 6 6	0 2 6 5	0 2 6 4	0 2 6 3	0 2 6 2	0 2 6 1	0 2 6 0	0 2 5 9	0 2 5 8	0 2 5 7	0 2 5 6	0 2 5 5	0 2 5 4	0 2 5 3	0 2 5 2	0 2 5 1	0 2 5 0	0 2 4 9	0 2 4 8	0 2 4 7	0 2 4 6	0 2 4 5	0 2 4 4	0 2 4 3	0 2 4 2	0 2 4 1
秋徽雨滲む梵字の捨て卒塔婆	ゆつくりと蛇の全長火星色	木犀の香りに気付きマスク取り	秋めくや佐原男の力瘤	逆光の水際眩し鬼やんま	父に供へる新米の握り飯	かぞえ日や過去という荷のまたひとつ	威勢よき飛沫に朝日出初式	目覚むれば亡夫の声なり秋彼岸	八朔や袴のてかる膝がしら	ひとかどの漢になれよ柏散る	稲架を組む島の棚田や遠汽笛	飛魚やジェットfoilと競い飛ぶ	離島の子舟で通園暖かし	海上の風車止まりて大夕焼	つれづれにききわけてみる虫の声	山の端にほのと残月梅漬くる	空仰ぐこと増えにけり原爆忌	鼻奥のつんと八月十五日	呪ひをかけてラグビーボール蹴る	戦中のはがき小さし遺書となりて	蟬の穴ガンに敗れた友の顔	働いて大夕焼の中帰る	かなかなや夕べの色の小夜曲	洞窟の幾億年や秋深し	秋涼の千手観音艶を増し	丸橋に立ちて街並灯の朧	仕合はせもくるみて蒸かす柏餅	やんばるの森の騒めき沖繩忌	

0 3 0 0	0 2 9 9	0 2 9 8	0 2 9 7	0 2 9 6	0 2 9 5	0 2 9 4	0 2 9 3	0 2 9 2	0 2 9 1	0 2 9 0	0 2 8 9	0 2 8 8	0 2 8 7	0 2 8 6	0 2 8 5	0 2 8 4	0 2 8 3	0 2 8 2	0 2 8 1	0 2 8 0	0 2 7 9	0 2 7 8	0 2 7 7	0 2 7 6	0 2 7 5	0 2 7 4	0 2 7 3	0 2 7 2	0 2 7 1
気動車のうなり軽やか花菜風	稲妻の触れし夜景の中に住む	すぐ乾く洗濯物や秋あかね	糶田のいきいきとして終農す	九十歳ざらとなる世のとろろ汁	唐黍を挽ぐほんたうの空の下	墓仕舞ひ終へ古里は麦の秋	廃校の裏門残る花石榴	枇杷熟るる海の匂ひの抜ける街	コスモスに色ある風の遊ぶかな	余生とて幸せな日々栗ごはん	セーターの腹に編み込む鬼の顔	稲光乳房雲の根這ひにけり	敵兵に向日葵の種渡す民	秋灯や目頭といふ熱きもの	山粧ふ全校生徒写生会	言ひたきを胸に戻して温め酒	七夕やはらりはらりと万華鏡	ロシア民謡青春の日の五月祭	六月の海に真珠を帰しけり	雪形は神の伝言出羽の富士	鳥帰るみな約束の大地あり	仏壇の上に神棚あたたかし	産み終へて喉をつるりと水蜜桃	パイロンをなぎ倒しゆく野分かな	水平と垂直の街鳥渡る	おくるみのレースのゆれて退院す	トロ箱に朝顔植ゑて所帯持つ	最果ての岬の先へ帰燕かな	天高し機影は最早米粒に

0 3 0 1  
0 3 0 2  
0 3 0 3  
0 3 0 4  
0 3 0 5  
0 3 0 6  
0 3 0 7  
0 3 0 8  
0 3 0 9  
0 3 1 0  
0 3 1 1  
0 3 1 2  
0 3 1 3  
0 3 1 4  
0 3 1 5  
0 3 1 6  
0 3 1 7  
0 3 1 8  
0 3 1 9  
0 3 2 0  
0 3 2 1  
0 3 2 2  
0 3 2 3  
0 3 2 4  
0 3 2 5  
0 3 2 6  
0 3 2 7  
0 3 2 8  
0 3 2 9  
0 3 3 0

沿線の薔薇や都電に女学生  
滑り込む埒上の笑み天高し  
海へ向け足を八の字籐寝椅子  
青鷺の止まらんとして首伸ばす  
風見鶏鳴くや暮秋の寂しさに  
亀鳴くや象はパオンと鼻を上ぐ  
見納めと決め稜線の桜まで  
双蝶や我にすこやかなりしとき  
学舎は幻の空蟬しぐれ  
九十九折峰に消えゆく夏帽子  
それぞれの秋ピアニツシモフォルテイシモ  
犬蓼の紅のはかなさ活けにけり  
ゆるやかに稜線暮るる朧月  
朝からの日射し手強しひろしま忌  
着替へ待つ菊人形のあばら骨  
ぼうたんや魂売りて逸句欲し  
茶が咲きて栄西像へまづ献花  
つなぐ手を解きたくなる花野かな  
橡餅を食ふ多武峰仰ぐ地に  
書の隅に点より小さき秋の虫  
凧揚げて因幡の風を子に持たす  
どよめきて佐渡の傾く船遊び  
柚子といふ太陽の子の浮力かな  
亀の鳴く置き去りの子の声聴きて  
呆けしは八十路の闘士ちちろ鳴く  
硝子屋が来て秋雲を替へてゆく  
突くほどに息吹きかへす紙風船  
妻の背のかくもさびしき十三夜  
ガガンボのンボのあたりが故障中  
世話人もみんな老人敬老日

0 3 6 0	0 3 5 9	0 3 5 8	0 3 5 7	0 3 5 6	0 3 5 5	0 3 5 4	0 3 5 3	0 3 5 2	0 3 5 1	0 3 5 0	0 3 4 9	0 3 4 8	0 3 4 7	0 3 4 6	0 3 4 5	0 3 4 4	0 3 4 3	0 3 4 2	0 3 4 1	0 3 4 0	0 3 3 9	0 3 3 8	0 3 3 7	0 3 3 6	0 3 3 5	0 3 3 4	0 3 3 3	0 3 3 2	0 3 3 1
朴落葉かざりと此の世振り返る	秋暑し口の大きな甕据わる	かなかなの磨き上げたる峡の空	憎しみは深き緋色に曼珠沙華	百歳と孫のあやとり小鳥来る	たそがれて棘やはらかき雨の薔薇	轆かれたる蛇に烏が輪をつくる	登山杖指して唱和す御製の碑	花どきや我ら芭蕉と曾良の仲	夏鶯深山の川へ声落とす	蜘蛛の囀の虚空しづかに夕づける	一粒の翡翠の銀杏手の平に	筏師の往時を歩む竹落葉	母校の灯消ゆ残雪の奥熊野	弟に灰と薬臭西瓜切る	松茸の笠の破れも味の内	秋気澄むやればできると思ふ今	教室へ九月の風の通り抜け	白南風や窓開け放ち深呼吸	痛いのも生きてる証春を待つ	愛犬の近況も添へ年賀状	暖かや差し入れ届く畑仕事	年金の少し足りぬが冬ぬくし	胡麻叩く祖母の傍ら眠る嬰	肩貸して頭を借りる初電車	夜半の虫水の如くに息をせる	秋の雲けふのコースはエルグレコ	曼珠沙華蕊の先まで一途なり	枝豆をつまみに止まらない話	赤い羽根つけホワイエに待つ接種

0390	0389	0388	0387	0386	0385	0384	0383	0382	0381	0380	0379	0378	0377	0376	0375	0374	0373	0372	0371	0370	0369	0368	0367	0366	0365	0364	0363	0362	0361
卷狩や山の掟は山に聞け	断捨離の妣の篋笥や桐一葉	一刷けの紅に始まる秋夕焼	わらび狩り母の背中の見ゆる距離	夏めくや青の濃くなる千枚田	語りべの一瞬の黙原爆忌	賢治忌や花野の風と塩むすび	草ゆれて蛇穴に入る所かな	天道虫七つの闇を背負ひけり	天牛や太陽うすき雨後の森	蝶過る進まぬ駅の大時計	辛夷咲く山に坑夫の無縁墓	東雲の風のにほひや金木犀	法要の庭に影ろふ螢かな	虫の音の間断闇を深くする	探梅や一村見ゆる丘に立ち	磔像は天を仰がず雁渡し	紅葉鮎一献のすぐ効きはじめ	満月や琴演奏の野外席	年惜しむ給水塔の影法師	十橋の語る鎌倉冬日和	只見線稔り田の中快走す	露踏みて長き畔ゆく蛇笏の忌	流さるるままに生きゆく土用入り	落款はどこへ押さうか鱗雲	揚雲雀撃たれしごとく麦の海	八月のオペラはぬれば外は雪	空蟬の艶増す朝や風天忌	足の爪切るや田植の泥こぼる	ちやん付けの名を呼びかはす盆の夜

0 3 9 1  
0 3 9 2  
0 3 9 3  
0 3 9 4  
0 3 9 5  
0 3 9 6  
0 3 9 7  
0 3 9 8  
0 3 9 9  
0 4 0 0  
0 4 0 1  
0 4 0 2  
0 4 0 3  
0 4 0 4  
0 4 0 5  
0 4 0 6  
0 4 0 7  
0 4 0 8  
0 4 0 9  
0 4 1 0  
0 4 1 1  
0 4 1 2  
0 4 1 3  
0 4 1 4  
0 4 1 5  
0 4 1 6  
0 4 1 7  
0 4 1 8  
0 4 1 9  
0 4 2 0

同級生ばかり出てくる傘寿の夢  
熟柿落つばあつと酒の匂ひかな  
コスモスを母抱くやうに抱きおこす  
新涼の百面相の赤ん坊  
遠富士やガードレールに稲を掛け  
出番なき海象涼しイルカショー  
秋うららイヤリング付け銀座線  
停電の部屋に飛び交ふいなびかり  
カウベルの音いろいろや風さやか  
無理やりに戸を開け出づる恋の猫  
大ぶりの鱗雲なり雨後の空  
春惜しむ出島の甘きかすていら  
楽焼のアンパンマンや秋うらら  
雪霏々と運河の街のほの灯  
狼やふるさとの川細りゆく  
二人部屋ひとりとなりて水中花  
卒業やたぶん記憶に残らぬ子  
倒木に添うてしらじら毒茸  
虎尾草の草に埋もれし房豊か  
独歩忌や四度手にする文庫本  
祖父も父も我も猫背ぞ石路の花  
なだらかな安房の山並櫓の穂  
少しずつ南瓜が顔になってゆく  
全身を空けて滝音受けにけり  
蓑虫の信ずるに足る糸一本  
淀殿をそつと抱へて菊師かな  
白菜の芯のそぎ切り卓の湯気  
キュビズムの図録は重し美術展  
安らかに灯し独居の秋彼岸  
蓮の実の飛ぶや無敵の脹ら脛

0 4 5 0	0 4 4 9	0 4 4 8	0 4 4 7	0 4 4 6	0 4 4 5	0 4 4 4	0 4 4 3	0 4 4 2	0 4 4 1	0 4 4 0	0 4 3 9	0 4 3 8	0 4 3 7	0 4 3 6	0 4 3 5	0 4 3 4	0 4 3 3	0 4 3 2	0 4 3 1	0 4 3 0	0 4 2 9	0 4 2 8	0 4 2 7	0 4 2 6	0 4 2 5	0 4 2 4	0 4 2 3	0 4 2 2	0 4 2 1
猪肉を捌く老斑確かな手	産土に待つ人はなし秋彼岸	頬杖をとけど深まる秋思かな	よく笑ひやがて寂しき林檎かな	くり返す波の心音浜の秋	遠山に暁紅の雲朝しぐれ	ささくれし母の手恋し虎落笛	血を吸ふ蚊みるみる腹の膨らみぬ	コロナ禍は数字の垣塙寒に入る	赤蜻蛉臀帖漂ふ青き空	野分去り潮満満と青き月	金肥は異国から来て青田風	鰯の腑に海洋ごみの名刺かな	ビルの窓秋の夕陽の方を向き	篝火に女鵜匠の薄化粧	棟方の乳房跳ね飛ぶねぶたかな	秘仏あり山紫陽花の院の奥	風太郎日記口語に変はる敗戦日	一心に鞍馬火祭描く男の子	天窓に立夏の空のひとかけら	手に計る新米を研ぐ水加減	手渡しに祀る菩薩や春立てり	熊の子を育て主の縷々縷言	万歩計見せ合ふ夫婦小六月	秋風や増ゆることなき箸茶碗	臥す母に金木犀の風入れむ	火の色に燃えるカンナや巫女の恋	彼岸会や水輪ちいさく鳥潜く	月桃に夜雲あかるき帰省かな	今日の月介護施設の内と外



0 4 5 1  
0 4 5 2  
0 4 5 3  
0 4 5 4  
0 4 5 5  
0 4 5 6  
0 4 5 7  
0 4 5 8  
0 4 5 9  
0 4 6 0  
0 4 6 1  
0 4 6 2  
0 4 6 3  
0 4 6 4  
0 4 6 5  
0 4 6 6  
0 4 6 7  
0 4 6 8  
0 4 6 9  
0 4 7 0  
0 4 7 1  
0 4 7 2  
0 4 7 3  
0 4 7 4  
0 4 7 5  
0 4 7 6  
0 4 7 7  
0 4 7 8  
0 4 7 9  
0 4 8 0

木犀やマスクの空気軽くなる  
郡上をどり幼も鳴らす下駄の音  
秋澄むや歌舞練場の撥さばき  
石段の静寂昇る秋の風  
トラクターゆるき坂行く目借時  
道の辺の花束に添へ缶甘酒  
鉄工所の働く音や秋高し  
新松子衣桁に掛かる能衣裳  
新聞を切り抜く夜や蚯蚓鳴く  
船火事に水掛け過ぎと思はぬか  
ひらがなのながれをるなり朝の露  
水舟の西瓜突いたり沈めたり  
二本立映画終りてラムネ抜く  
大花野風の豊かに奔りけり  
塵食んで水牛は生く棕櫚の花  
買ひ手なき小牛とんばうたはむれる  
万緑の山懐に入りにつけり  
国分寺跡へ傾ぎて鷹柱  
逃水を追つて湖畔にペダル漕ぐ  
真青なる宙ささへたり寒の富士  
漂へる畦焼くにほひ無人駅  
風花や闇やがて濃き奥の院  
秋陰やマトリヨーシカを閉ぢしまま  
鍋一杯おでん残して旅の妻  
秋あかね漬物桶に水張つて  
継ぐ命偲ぶいのちの踊りけり  
露の世の露の宿りに物溜めて  
まづ花に水を八月十五日  
骨太の祖母の拾骨花カンナ  
冬紅葉人は死にゆく日を知らず

0 5 1 0	0 5 0 9	0 5 0 8	0 5 0 7	0 5 0 6	0 5 0 5	0 5 0 4	0 5 0 3	0 5 0 2	0 5 0 1	0 4 9 9	0 4 9 8	0 4 9 7	0 4 9 6	0 4 9 5	0 4 9 4	0 4 9 3	0 4 9 2	0 4 9 1	0 4 9 0	0 4 8 9	0 4 8 8	0 4 8 7	0 4 8 6	0 4 8 5	0 4 8 4	0 4 8 3	0 4 8 2	0 4 8 1	
点滴の一滴の闇や枯木星	好天やコスモス揺るる通学路	紙雛の折り目正しき着付けかな	レモン飴酸っぱくて春遠からじ	フラメンコ春月へ手を伸ばしけり	泣き虫の長子が親に新松子	木の実落つ一句拾つて帰りけり	鯛のこゑの傘下に吾子の墓	みな枯るる張りつめしものくづほれて	河鹿鳴く闇やおのづと抜き足に	ふるさとの零れるような冬の星	秋暑し満員バスの峠越え	畑守の鎌研ぐ秋の夕焼かな	曼珠沙華この道ゆきて妣に逢はむ	縄文の矢尻出土地大根蒔く	橡餅や姉の手紙の字のゆがみ	寒鴉色なき空へ飛び立ちぬ	鳥去つて風の木となる月夜かな	残業の静けさバレンタインの日	小春日や湖畔ホテルの花車	一日五便の駅長柿熟るる	胴塚と離る首塚身に入めり	秋澄むや五指をひらきて児のノック	石畳そして石段穴まどひ	母と夫看取りし指や胡瓜揉	紅の濃さに疲れし落椿	魚影なく流れて澄めり秋の川	命綱夫に託して海女潜る	箱庭の森に魁夷の白馬置く	お互ひに生きてゐるぞと賀状書く

0511  
0512  
0513  
0514  
0515  
0516  
0517  
0518  
0519  
0520  
0521  
0522  
0523  
0524  
0525  
0526  
0527  
0528  
0529  
0530  
0531  
0532  
0533  
0534  
0535  
0536  
0537  
0538  
0539  
0540

長き夜やナースコールを手探りで  
子猫自在やどの骨からも曲がる  
完璧に空は澄み児はよく眠る  
長く長くりんごの皮を剥き独り  
送迎車の母の笑顔や野菊晴  
小鳥来る媪の笑みは皺のなか  
飛び跳ねて兵児帯跳ねて夏まつり  
新刊を抱き早足うろこ雲  
洗ひ場に鎌乾きをり法師蟬  
囀逸る鼓動を手摺みに  
一村の一山つつむ柿すだれ  
風音は子規の喘鳴糸瓜垂る  
かなかなと朝から鳴きて敗戦日  
常臥の父の温顔竹の春  
鯉飛ぶや富士を間近の浜歩き  
夜通しの男体嵐荒びけり  
真つ青な空真つ新な今年竹  
夕刊に少し湿り気十三夜  
拾うては見たもののでさて榎櫃の実  
老いといふ下山も楽し梅探る  
鰯雲白線引きて走り出す  
しやきしやきと骨切り軽き鱧料理  
笠地藏めく菰かぶり寒牡丹  
朝顔の真正面の朝ごはん  
実石榴も心も弾け徒日和  
田の中をはしる単線うろこ雲  
紅葉かつ散るや水面の夕映えに  
潮入の川のうねりや星祭  
遊び蔓吹かれてゐしが枯れにけり  
七五三宇宙旅行を夢見る子

0570	0569	0568	0567	0566	0565	0564	0563	0562	0561	0560	0559	0558	0557	0556	0555	0554	0553	0552	0551	0550	0549	0548	0547	0546	0545	0544	0543	0542	0541
丈低きあぢさるばかり龍飛崎	流星や海は珊瑚の孵化盛ん	宿下駄の音の過ぎ行く良夜かな	釣瓶落し刺ある言葉聞き流し	みちのくの暮るる速さや柿簾	読点に台詞分け合ふ聖夜劇	ひんやりと氣息しづもる夕桜	書留の梅雨のしめりに押印す	昨夜をおもふ今朝のいてふの落葉道	千の外灯一斉に点く冬至かな	薺打つ音や隣家のつつがなし	新米に友の律儀の重さあり	追儺来る寺に一基の耶蘇灯籠	子は未来父過去語る月見酒	農を継ぎ祭囃子の笛を継ぐ	梅見茶屋吾を忘れし祖母を抱く	酒蔵の井戸に神在す水の秋	木蓮の一糸まとわぬ白さかな	鰯雲小舟ばかりの漁港かな	疎開して我を生みたり伊予は夏	爛熱うせよ潮騒の高ければ	抱き寄せて花の仕舞の萩括る	秋寒や葉に優る朝の白湯	十年の旅券まつさら夏惜しむ	硝煙の無き青空や揚雲雀	盆梅や三代の技積み重ね	初刷のずしりと重き自粛の世	石一つとなり帰国や終戦忌	新涼や鳶舞ひ上がる由比ヶ浜	乱れなき着地出発稲雀

0 5 7 1 暮の秋漬物石を洗いけり  
 0 5 7 2 身に入むや父の遺品の小銭入  
 0 5 7 3 いぼむしり一揆の鎌を振りかぶる  
 0 5 7 4 水澄めり手に汲めば手の清らかに  
 0 5 7 5 白藤や水面に光返しをり  
 0 5 7 6 山法師ここだく揺れて風の夕  
 0 5 7 7 朝燕ひかり啣えて来たりけり  
 0 5 7 8 たつぷりの日の香潮の香蜜柑山  
 0 5 7 9 過ぎし日の夢ばかり見る浮寝鳥  
 0 5 8 0 文鎮の位置まづ決めて筆始  
 0 5 8 1 疊替古民家にある隠し部屋  
 0 5 8 2 十葉の砂利つきぬけて列なせり  
 0 5 8 3 大寒の温とつく物みな旨し  
 0 5 8 4 八月の壁に兜太の怒り文字  
 0 5 8 5 胎内の水音覚ゆ蓮の花  
 0 5 8 6 母の笑追ふ嬰の笑赤のまま  
 0 5 8 7 秋冷や村沈みたる湖の色  
 0 5 8 8 ただならぬ雷鳴うなる獣道  
 0 5 8 9 母座る花野の隅に瘡地藏  
 0 5 9 0 僧堂の跡形もなし秋出水  
 0 5 9 1 白い歯の輝く子らの卒業式  
 0 5 9 2 等圧線なだらかな日や春田打つ  
 0 5 9 3 種選りの口をすぼめて土間の闇  
 0 5 9 4 ブラジルの未開地めざし葉掘る  
 0 5 9 5 山際の雲の勢ひ秋時雨  
 0 5 9 6 紅葉散る庭師に光るピアスかな  
 0 5 9 7 花野中嬰のくつろぐ息づかい  
 0 5 9 8 忘れまい慰霊の日なり蟬時雨  
 0 5 9 9 鬼灯を鳴らし来世を契りけり  
 0 6 0 0 裸木の武骨あらはとなりけり

0 6 0 1  
0 6 0 2  
0 6 0 3  
0 6 0 4  
0 6 0 5  
0 6 0 6  
0 6 0 7  
0 6 0 8  
0 6 0 9  
0 6 1 0  
0 6 1 1  
0 6 1 2  
0 6 1 3  
0 6 1 4  
0 6 1 5  
0 6 1 6  
0 6 1 7  
0 6 1 8  
0 6 1 9  
0 6 2 0  
0 6 2 1  
0 6 2 2  
0 6 2 3  
0 6 2 4  
0 6 2 5  
0 6 2 6  
0 6 2 7  
0 6 2 8  
0 6 2 9  
0 6 3 0

五平汁生涯抜けぬ国訛り  
西の市運と話術を買いに行く  
軍隊はいらないと蟻行進す  
メールにて同じ満月観てをりぬ  
札所寺めぐる秩父の冬紅葉  
不破の関群雄割拠の夢の跡  
白足袋の爪先キュツと参観日  
垂幕は校舎の長さばつた跳ぶ  
身に入むや眼鏡の曇る日の出ごろ  
膨れゆくこゑを固めて雪まろげ  
真さらな闇を糝すや恋蛍  
みちのくの銀河の駅に途中下車  
遠山に宝珠を返す秋没日  
花すみれ浅き轍の作業道  
金閣の金の雫の大夕立  
殉教の島に露けし比翼塚  
一湾の銅鑼の音ひびく月港  
隴月蕪村の恋句拾い読み  
ラジオ体操終へし公園蟬時雨  
ユニフォームより砂こぼれ夏果てぬ  
ドロップのやうに味はふ詩や夜長  
蝸螂や村は勝気な婆ばかり  
エプロンにくしやくしやのメモ冬隣  
秋晴やこの身干すべく野に出づる  
たちまちに神の領域雪しまく  
臨月の腹の子撫づる良夜かな  
静かなる手話の激論秋深し  
包丁のリズム軽やか水温む  
峰雲やリュックの蓋の文庫本  
柿くへば十七番がホームラン

0 6 3 1  
0 6 3 2  
0 6 3 3  
0 6 3 4  
0 6 3 5  
0 6 3 6  
0 6 3 7  
0 6 3 8  
0 6 3 9  
0 6 4 0  
0 6 4 1  
0 6 4 2  
0 6 4 3  
0 6 4 4  
0 6 4 5  
0 6 4 6  
0 6 4 7  
0 6 4 8  
0 6 4 9  
0 6 5 0  
0 6 5 1  
0 6 5 2  
0 6 5 3  
0 6 5 4  
0 6 5 5  
0 6 5 6  
0 6 5 7  
0 6 5 8  
0 6 5 9  
0 6 6 0

遅刻生待つて始業の夜学かな  
靴下をつぐ事もなし久女の忌  
地酒酌む湯気の立ちたる衣被  
人間のままで生きたし終戦日  
春永や駱駝のごとく腹這ひぬ  
ナイスキャッチ河馬の三時の西瓜飛ぶ  
除夜の鐘消えぬ介護のうすあかり  
大銀河四季ある星の数知らず  
長き列横目に過ぐる街師走  
初芝居京へ乗換案内かな  
淡雪や枯山水の庭閑か  
花ミモザゴッホをも狂はせたかと  
満月の皓々として山静か  
取られても取られても捕る鵜飼かな  
救急車音ほど雪を蹴散らさず  
まつさきに乗馬体験天高し  
門柱のゆかりの家紋百匁柿  
林檎剝く慣れぬ手付の介護夫  
空に線海に線ある秋思かな  
鴟の贅しかめつ面に乾きたる  
秋麗や天気予報のよく当たり  
竹皮を脱ぐや小高に義民墓所  
夕虹や父のにはひの肩車  
無口なる妻の饒舌氷頭鱈  
秋晴れや則天去私の境地なり  
三鬼忌の轍の中の蛙かな  
蓮華坐の露のひとつと遊びけり  
産声や手の桜餅踊り出す  
秋の蚊に皺を掻き分け刺されけり  
紙切れのあらばペン持つ瀬祭忌

0 6 6 1  
0 6 6 2  
0 6 6 3  
0 6 6 4  
0 6 6 5  
0 6 6 6  
0 6 6 7  
0 6 6 8  
0 6 6 9  
0 6 7 0  
0 6 7 1  
0 6 7 2  
0 6 7 3  
0 6 7 4  
0 6 7 5  
0 6 7 6  
0 6 7 7  
0 6 7 8  
0 6 7 9  
0 6 8 0  
0 6 8 1  
0 6 8 2  
0 6 8 3  
0 6 8 4  
0 6 8 5  
0 6 8 6  
0 6 8 7  
0 6 8 8  
0 6 8 9  
0 6 9 0

通学の二人に土橋山葡萄  
開校碑ありて閉校鳥雲に  
新米研ぐ妻無造作に髪束ね  
棒切れにわづかな温み賜日和  
熟柿いま小さき火球となるつもり  
やまびこの石橋山や雁渡し  
木犀や災害用の井戸遺す  
富士ありて定まる甲斐の初山河  
じやんけんで決める幽霊村芝居  
細切れの記憶のパズル鰯雲  
追伸のやうに雨来る木槿かな  
天国に帰り道なし木の実独楽  
さつぱりと訣別したりセロリ噛む  
にはとりの声の躓く春彼岸  
背を伸ばし卒寿生きるや百日草  
世代差の桜のやうな恋でした  
知足といふコスモスに会ふ越の国  
寒日和鉄の杭打つ槌の音  
太鼓台ぶつかりあひて天高し  
生きている水のきらめき酷暑の日  
蜘蛛の囿の今日も未完の夕べかな  
鋼打つ火は夏空に飛び散りて  
名月や檜皮の反りに差し掛る  
新玉の海の一閃子の未来  
星流れ雫のごとく海に消ゆ  
婿殿は手酌で一合お年取り  
歩荷負ふ荷に山菜の漉油  
栗駒の稜線つづく星月夜  
雷鳥のひな呼ぶ声よ岩の上  
春潮の滴る漁船いま浜へ



0720	0719	0718	0717	0716	0715	0714	0713	0712	0711	0710	0709	0708	0707	0706	0705	0704	0703	0702	0701	0700	0699	0698	0697	0696	0695	0694	0693	0692	0691
泣き止まぬ赤子に母乳月涼し	被ばく碑になお射しかかる晩夏光	いさぎよく旅を諦め林檎剝く	病院の帰りは歩き梅日和	桜どきひとり帰れと影に言ふ	梅雨に入る鍋に弾けるポップコン	膝正し花びら餅に畏まる	丁寧に一事一事を今日の菊	どこまでも八月の空黒き影	過疎といふ重き現実蕎麦の花	椎の実の敷き詰む道や樹木葬	悠悠と泳ぐ鯉の背春近し	コスモスや恋の話は石蹴つて	聞こえると言ひ聞こえぬと言ふ虫の闇	水色の水となりけり秋高し	遠会釈交はすホームやつづれさせ	音もなく庭下駄ぬらす花の雨	子を帰し大きく拡げる踊の輪	岳父とは続かぬ会話春を待つ	満月やうっかり妻と手をつなぎ	八月やただ一分の黙だけか	霧の白樺暁は湖より来	日暮れいつしか秋燕はもういない	十二月八日義足教師の沈黙す	ぐりとぐらと行けば近道秋の森	菰少し上げて二輪の冬牡丹	秋螢一瞬間をよぎりけり	本当は怖い童話や声おぼろ	春めくとすぐにも欲しき翼かな	揺れ止まぬ鱭は火の色闘魚かな

0 7 2 1  
0 7 2 2  
0 7 2 3  
0 7 2 4  
0 7 2 5  
0 7 2 6  
0 7 2 7  
0 7 2 8  
0 7 2 9  
0 7 3 0  
0 7 3 1  
0 7 3 2  
0 7 3 3  
0 7 3 4  
0 7 3 5  
0 7 3 6  
0 7 3 7  
0 7 3 8  
0 7 3 9  
0 7 4 0  
0 7 4 1  
0 7 4 2  
0 7 4 3  
0 7 4 4  
0 7 4 4  
0 7 4 5  
0 7 4 6  
0 7 4 7  
0 7 4 8  
0 7 4 9  
0 7 5 0

吉兆か梁にゆらゆら朝の蜘蛛  
佳き風に鍬休めたり鴟の声  
そよ風に野良着のわれと初蝶と  
花は葉に見送る牛の目は涙  
立ち枯れのひまわり凜と崩れざる  
再会の席の果てたる風の色  
一分の短し長し八月来  
恵方卷天下御免の丸かじり  
酔へばすぐ釣り師自慢の大鮪  
表札に吾が名の雅号梅津月  
賛美歌の会場は何処アマリリス  
三寒は籠り四温は畑を鋤く  
終戦日母は卒寿の手を合はす  
八月の徒事ならぬ黒い雨  
藁蒲団今際の祖父を看取りけり  
幼な名で声掛けられし墓参  
槍投げる背筋のたわみ秋夕焼  
加速する短距離走者天高し  
讚美歌の降るか牧場にかかる虹  
蝶渡り行くアフガンの用水路  
パスワード不一致銀河に立ち尽くす  
敗戦日南の空を拝む母  
路地に風ぶつかりさうに鬼やんま  
どんぐりの落ち放題や神楽殿  
風船かづら飛ばんと力たくはへて  
木の葉髪日日の翳りを梳きにけり  
りんだうの滅紫や地獄谷  
俎板の水喜々として祭鱧  
集落の杖の一灯山桜  
砲音に涙目のあり鷹柱

0 7 5 1  
0 7 5 2  
0 7 5 3  
0 7 5 4  
0 7 5 5  
0 7 5 6  
0 7 5 7  
0 7 5 8  
0 7 5 9  
0 7 6 0  
0 7 6 1  
0 7 6 2  
0 7 6 3  
0 7 6 4  
0 7 6 5  
0 7 6 6  
0 7 6 7  
0 7 6 8  
0 7 6 9  
0 7 7 0  
0 7 7 1  
0 7 7 2  
0 7 7 3  
0 7 7 4  
0 7 7 5  
0 7 7 6  
0 7 7 7  
0 7 7 8  
0 7 7 9  
0 7 8 0

海明けや牧牛しかと地を鳴らす  
春耕や喜寿も傘寿も益荒男に  
自転車の籠にしばらく揚羽蝶  
秋風の海に暮色の帆をたたむ  
枯草の岡に夕日の滑り来て  
肘枕して耳元は虫の闇  
醉芙蓉朝に紛るる一つかな  
夕雲の縁より赤む秋の湖  
万緑や早世の子の婚の絵馬  
白木槿母と交わせぬ「また明日」  
月凍つる丹頂永久の祈りとも  
風花にいざ一票と杖をつく  
大花野童となりて母を追ふ  
流星や待合室の常夜燈  
秋の田の暮色の中に白き鷺  
母の顔祖母に重なり冬の月  
うす墨の心ひと文字草の花  
懸垂の春色の空二秒間  
どの顔もどんぐりまなこ入学児  
枯蟻螂仏陀の顔とユダの顔  
風花や遊び足りなき子のよう  
卓袱台にバラ一輪の仲直り  
切りたての西瓜に咽び老兆す  
玉虫も嵌めて螺鈿の光かな  
山の壁宇宙の壁やかたつむり  
小豆干す古新聞の俳句欄  
甕の月一氣に掬ふ銀杓子  
ちよっと見てさっと素通り生秋刀魚  
新米や天下国家を語る人  
敗戦日昨非今是のデモクラシー

0 7 8 1  
0 7 8 2  
0 7 8 3  
0 7 8 4  
0 7 8 5  
0 7 8 6  
0 7 8 7  
0 7 8 8  
0 7 8 8  
0 7 9 0  
0 7 9 1  
0 7 9 2  
0 7 9 3  
0 7 9 4  
0 7 9 5  
0 7 9 6  
0 7 9 7  
0 7 9 8  
0 7 9 9  
0 8 0 0  
0 8 0 1  
0 8 0 2  
0 8 0 3  
0 8 0 4  
0 8 0 5  
0 8 0 6  
0 8 0 7  
0 8 0 8  
0 8 0 9  
0 8 1 0

真つ青なキーウの空の鱗雲  
鉢植ゑの仄と縮みし秋の薔薇  
けふはやや人間ぎらひ草の花  
秋の暮しつぼどこかに置き忘れ  
目借時やめた煙草を夢に吸ふ  
風の色替わる晩秋の手ぶら  
鎌倉の猫と冬陽の道すがら  
運命と因果含めて毛虫焼く  
チャイム鳴り昼を盛りの日照草  
秋高や砂をどらせて川湯噴く  
丹波路の豆稻架風に鳴りゐたり  
錆鮎の水より迅く流れをり  
艚を休め芦の穂絮と吹かれをり  
夜を徹し神楽稽古の笛の音  
起きぬけの布団にさへも躓ける  
枝折戸に萩の風ある茶席かな  
鮫鱈のつるしぎりてふ人だから  
射止めたる猪桁外れなる重さ  
焚き終へて燠の気高き牡丹かな  
板炭のふた夜の煙りうすれけり  
玲璃と笛の音響く月の能  
釘を打つ馬蹄師の汗滂沱たり  
爪弾きされたる如く星流る  
葬列の霜踏む調べレクイエム  
気付かずに古稀も過ぎたりキリギリス  
五月病鼻で笑って吹き飛ばす  
鯖寿司や父と対話の夜を過ごす  
ベランダでおむつと泳ぐ鯉幟  
春泥の靴ばかりなり算盤塾  
凶作や来年こそと鎌を研ぐ

0 8 1 1  
0 8 1 2  
0 8 1 3  
0 8 1 4  
0 8 1 5  
0 8 1 6  
0 8 1 7  
0 8 1 8  
0 8 1 9  
0 8 2 0  
0 8 2 1  
0 8 2 2  
0 8 2 3  
0 8 2 4  
0 8 2 5  
0 8 2 6  
0 8 2 7  
0 8 2 8  
0 8 2 9  
0 8 3 0  
0 8 3 1  
0 8 3 2  
0 8 3 3  
0 8 3 4  
0 8 3 5  
0 8 3 6  
0 8 3 7  
0 8 3 8  
0 8 3 9  
0 8 4 0

托鉢や衣の中は除夜の鐘  
泣き止みて幼は主役小鳥来る  
一枚の三行の文火恋し  
うねりつつ青田は風となりにけり  
少年期の断片箱眼鏡の砂  
炎天下時給一千二百円  
焼き芋の真ん中ゆずる姉妹  
寒卵割るや黄身から先に落ち  
生身魂走り走りて世界新  
国葬の前夜に虫のかまびすし  
虫籠に虫待つ空の青さかな  
まだ触れぬ白桃夜を匂ひけり  
また一人露地へ折れゆく夜寒かな  
笙ひちりきに始まる神事照紅葉  
寄りて見て触れてしみじみ牛蒡の実  
浜にゐる人々の隙夏が去る  
冬の日や子が撞けば鐘小さく鳴る  
身体も意識も埋む秋桜  
少女らの内緒話と酔芙蓉  
登校の声なき朝の彼岸花  
路地裏の小さき空や花吹雪  
日常か試練の時か蟻のゆく  
木犀の香や新婚のワnlーム  
ふるさとの百万本の薔薇まつり  
水撒けばひなたのにほひ草の花  
五線譜に音符にぎやか鳥渡る  
冬めくや屋台の煙浴びて過ぐ  
骨密度の話地声に牛蒡引く  
綿虫の蒼し遅れて友の着く  
切株に腰下ろすなり紅葉山

0841 立冬の川へ少年石投げて  
 0842 競り合ってテープを切りぬ紅葉晴  
 0843 浅き冬駅頭に人集いたる  
 0844 馬子唄の合の手美しき豊の秋  
 0845 連山のはたと暮れたり冬安居  
 0846 冬晴や山門覆ふ高野楨  
 0847 疫の世を日和まかせの雪蛩  
 0848 黄菊白菊来世も母の苗床で  
 0849 留守三日羽伸ばしをり秋の庭  
 0850 鼻欠けし羅漢の顔に落葉降る  
 0851 秋色や天文台のゆるき丘  
 0852 「燕帰る」六文字だけの日記帳  
 0853 眦の強き農夫や麦の秋  
 0854 原発の廃路さ迷ふ草の絮  
 0855 街川に魚のあぎとふ原爆忌  
 0856 花曇遺影掛けある空き獣舎  
 0857 竹取りのおきなかなしき今日の月  
 0858 冬浅し波立つ朝の船着場  
 0859 いいこともそのうちあると草の花  
 0860 秋天へ桴突き差して終演す  
 0861 霧はれて鉞山跡へつづら道  
 0862 光りつつ鷹の渡りに迷ひなし  
 0863 帰り花会はねば人は忘れられ  
 0864 両袖をかざせば翼初衣裳  
 0865 木の株に昼餉のむすび小鳥来る  
 0866 百姓として生を終へたり蚯蚓鳴く  
 0867 玉葱を吊るす軒下猫の道  
 0868 朝顔や玄関塞ぐ子らの靴  
 0869 忘らるる冬の帽子や無人駅  
 0870 厨には季語が一杯だいこ煮る

0 8 7 1  
0 8 7 2  
0 8 7 3  
0 8 7 4  
0 8 7 5  
0 8 7 6  
0 8 7 7  
0 8 7 8  
0 8 7 9  
0 8 8 0  
0 8 8 1  
0 8 8 2  
0 8 8 3  
0 8 8 4  
0 8 8 5  
0 8 8 6  
0 8 8 7  
0 8 8 8  
0 8 8 9  
0 8 9 0  
0 8 9 1  
0 8 9 2  
0 8 9 3  
0 8 9 4  
0 8 9 5  
0 8 9 6  
0 8 9 7  
0 8 9 8  
0 8 9 9  
0 9 0 0

空蟬はデスマスクなり遙かなり  
朝冷に並ぶ野菜や土匂う  
山中の闇をまとひて黒揚羽  
日の匂ひ月の匂ひの七日粥  
首筋の他は艶やか春の鹿  
ゴンドラは光の器春來たる  
梅ひらく庫裡へ魚板の響きけり  
鬼の子と呼ばれひとり糸電話  
横顔はキリストのやう秋遍路  
笹鳴きや御成街道陣屋跡  
草の秀を跳ね秋の蜂ひかりけり  
子のジャンパー抱へ処置室前暗し  
銀漢や家族のためと志願兵  
降る雪の水を溶かしてゆく様な  
筑波嶺の風に吹かれて三尺寝  
先行句判明のため、予選通過を取り消しました  
留鳥へ餌を撒く男秋高し  
秋澄むや佐渡赤石の手水鉢  
里山の空染め上げる柿花火  
かなかなのかな溢れ出す句帳かな  
露あまた草葉しげに色放つ  
三年の熱量込めて昇く神輿  
諫言に甘言勝る四月馬鹿  
木犀の双樹かすかに和音の香  
靴下を脱ぐ奴も居て夏座敷  
白日傘回して弾く浜の日矢  
来世紀生くる児も居る星祭  
戻り来る妣の時空や障子貼る  
大仏の大てのひらや惜春忌  
恐竜の骨出す山や鳥雲に

0 9 0 1  
0 9 0 2  
0 9 0 3  
0 9 0 4  
0 9 0 5  
0 9 0 6  
0 9 0 7  
0 9 0 8  
0 9 0 9  
0 9 1 0  
0 9 1 1  
0 9 1 2  
0 9 1 3  
0 9 1 4  
0 9 1 5  
0 9 1 6  
0 9 1 7  
0 9 1 8  
0 9 1 9  
0 9 2 0  
0 9 2 1  
0 9 2 2  
0 9 2 3  
0 9 2 4  
0 9 2 5  
0 9 2 6  
0 9 2 7  
0 9 2 8  
0 9 2 9  
0 9 3 0

漕ぎ出してみたきみ空や鰯雲  
フクロウの鳴き声一つ山眠る  
浮寝鳥付かず離れずなきもせず  
山繭の交尾渦ある羽かさね  
秋ひとり大空ゆらす逆上がり  
新涼や水のあと追ふ水の音  
銀杏散る運河通りを二階バス  
翩翻と釣り船の旗晩夏光  
学校の花壇に名札鳥渡る  
豊年の風の敷布のなかに入る  
戻ること叶わぬ祖国星月夜  
何物も持たざる自由青蜜柑  
銅板のゴッホのひまはり見て涼し  
代々の墓には入らず秋の蝶  
好きでゐること短くてソーダ水  
立ちしまま虚数解く子や春の雲  
うそ寒や忘れかけたる人の夢  
稲穂波高速道の貫けり  
身にしむや苦言のメール娘より  
常用の薬二粒水温む  
古酒を注ぎ根性論を説く翁  
ラケットの弾く春光コート脇  
好物は人に譲らず揚なすび  
山の端に隠す右足オリオン座  
浮く亀の四肢伸ばしけり未草  
勤めきし三つ廃校朝ぐもり  
緩和ケアの祈りの棟よ小鳥来る  
翁忌や夕日しみ入るビルの窓  
夏空を鯉の割りたる城の濠  
最後迄父を演じよ木の葉髪



0 9 3 1  
0 9 3 2  
0 9 3 3  
0 9 3 4  
0 9 3 5  
0 9 3 6  
0 9 3 7  
0 9 3 8  
0 9 3 9  
0 9 4 0  
0 9 4 1  
0 9 4 2  
0 9 4 3  
0 9 4 4  
0 9 4 5  
0 9 4 6  
0 9 4 7  
0 9 4 8  
0 9 4 9  
0 9 5 0  
0 9 5 1  
0 9 5 2  
0 9 5 3  
0 9 5 4  
0 9 5 5  
0 9 5 6  
0 9 5 7  
0 9 5 8  
0 9 5 9  
0 9 6 0

野路まだ幼しと摘む香のつよき  
肩先のぬくみへ縋る冬蜻蛉  
港江に堂塔の鐘冬に入る  
頬づゑの芋銭河童や沼の秋  
そこはかと匂ふ酒樽草の花  
中心のなき円ゑがく赤蜻蛉  
薫風を独占するや釣の糸  
一つづつ柀目を埋める長き夜  
豊の秋まだ生きてゐる尺貫法  
踊り場は安堵のひとつ鳥帰る  
君すでに居らず我ゐる星月夜  
歌ふ子の歌詞でたらめや鰯雲  
彼岸花西方浄土へ道なりです  
空真青けふ天国も清秋か  
春の夜の脳ドリルとは気乗りせぬ  
大の字の和毛の仔猫甘き香や  
潮騒へ男結びの稲架を解く  
さみどりの抹茶漉しゐる良夜かな  
栗飯や母すこやかに農婦たり  
鋤の柄に古き刻印雲の峰  
秋天を大きく広げ庭師去る  
単線の停車八分花カンナ  
この家はいつも忙しげ暮の秋  
秋めくや土蔵に古き藁むしろ  
珈琲を溢さぬやうに蟻払ふ  
兵役を知らぬ吾が代や酔芙蓉  
独り居の父の背中に月夜茸  
吾亦紅仕立て直しの恋もある  
寒紅をひくや女でなくなる日  
ていねいにははのつくろふはるひがさ

0 9 6 1  
0 9 6 2  
0 9 6 3  
0 9 6 4  
0 9 6 5  
0 9 6 6  
0 9 6 7  
0 9 6 8  
0 9 6 9  
0 9 7 0  
0 9 7 1  
0 9 7 2  
0 9 7 3  
0 9 7 4  
0 9 7 5  
0 9 7 6  
0 9 7 7  
0 9 7 8  
0 9 7 9  
0 9 8 0  
0 9 8 1  
0 9 8 2  
0 9 8 3  
0 9 8 4  
0 9 8 5  
0 9 8 6  
0 9 8 7  
0 9 8 8  
0 9 8 9  
0 9 9 0

ひかへめな母の一生花八手  
鉛筆の音のほかなき霜の夜  
啓蟄や予約の要らぬ島の歯科  
こどもの日なにはともあれ肩車  
秋風や潮の香りの外野席  
大原の闇の底より虫時雨  
八月や千羽鶴折る小さき手  
月下美人月夜に生れ月へ咲く  
落し所が大事よと松手入れ  
脱ぎ捨てる勇氣も知らず冬マスク  
炎天へ打つて出てゆく威を正し  
稲刈や閉校近き小学校  
カンナ咲く白一線の波頭  
菜の花や尼手作りのパン芳し  
日本に不文の掟去年今年  
人の目のあつまる浅瀬鮭のぼる  
廃屋の籬傾け夏蜜柑  
露の玉光を捉へ光りけり  
いぼむしり水晶色の殻のこし  
五月闇眼下に確とタワーブリツヂ  
秋草の賑はふ庭となりにけり  
来し方を妻と反芻秋深し  
身に入むや今もアンネは屋根裏に  
斎場に死者のみ笑顔蟬時雨  
沖眺め花火師たちの昼餉かな  
病葉や真水乏しき水の星  
クリムトの金の輝き冬に入る  
人呑みこみ人吐き出して駅寒し  
夜食置き母の足音遠ざかる  
秋深し戦ぎに耳を研ぎ澄ます

0 9 9 1 人気なき水面に映る紅葉かな  
 0 9 9 2 散ることの自由を春の造花にも  
 0 9 9 3 鈴虫の鳴きつくしたる夜明けかな  
 0 9 9 4 城内に古き女子校秋小鳥  
 0 9 9 5 初盆を終へし安堵と淋しさと  
 0 9 9 6 蔓有りと蔓無し迷ふ種袋  
 0 9 9 7 恋猫の命かけたる足の怪我  
 0 9 9 8 初秋刀魚けぶり諸共いただきぬ  
 0 9 9 9 炎帝に影の重たき爆心地  
 1 0 0 0 蓮根掘る異界へと手を差し入れて  
 1 0 0 1 空蟬の確と擱める地球かな  
 1 0 0 2 秋しぐれ遺灰の中に骨拾ひ  
 1 0 0 3 無花果にカナ振ってあり無人市  
 1 0 0 4 堂々とひび割れ無農薬トマト  
 1 0 0 5 廃村地今日を限りの祭笛  
 1 0 0 6 石に影草に風秋立ちにけり  
 1 0 0 7 曼珠沙華「恋」より「戀」が良かりけり  
 1 0 0 8 終活は未完寒露の癌告知  
 1 0 0 9 鳳仙花父の生家の深き井戸  
 1 0 1 0 木の芽晴牛の鼻紋を登録す  
 1 0 1 1 みちのくの海みちのくの初日の出  
 1 0 1 2 避難指示解除の町や小鳥来る  
 1 0 1 3 赤紙に召されし儘やうろこ雲  
 1 0 1 4 鎌倉や軒を横たふ蔦紅葉  
 1 0 1 5 新茶汲む脱稿近き唸り声  
 1 0 1 6 薄味の蕨の煮付夕ごころ  
 1 0 1 7 調光の居間は暖色浅き春  
 1 0 1 8 囀りに木々いっせいに笑いだす  
 1 0 1 9 蛇の衣石垣歪めつつ昇る  
 1 0 2 0 ぶつ切りの鮭の荒塩床に散る

1050	1049	1048	1047	1046	1045	1044	1044	1043	1042	1041	1040	1039	1038	1037	1036	1035	1034	1033	1032	1031	1030	1029	1028	1027	1026	1025	1024	1023	1022	1021
思惟仏が鈴振るやうな春の風	星ひとつ従へ今宵十三夜	敗戦日夕餉ふたりの足の裏	しがらみの枯草燃やし旅支度	小さきカフェは町の縁側小鳥来る	夏草や有刺鉄線工場あと	天井に水の斑ゆるる小六月	おもむろに巨船接岸天高し	湖国晩秋灯りて淡き浮御堂	大空の端から端へ鳥渡る	豊の秋地産地消の市盛ん	鶏を逆さに吊す根雪かな	太白や秋風に聴く波の音	逆巻ける潮入りの湖秋高し	長靴の土間ごと跳ぬる雪の雷	折鶴の飛び立ちさうな月夜かな	朝露を踏みしめてゆく始発駅	ゆらゆらと揺るる浮橋あゆの風	八十の今が春かも大根煮る	母の名を指でなぞりて墓洗ふ	息絶えし人に寄り添ふ夜長かな	仏彫る一刀の蔭秋深し	茸汁先づは香りを啜りけり	桐箱に納む能面秋惜しむ	三体のマリア地蔵に残暑光	宅急便一番上はしろつめ草	海の日を海見ゆるまで登りをり	Wifiを繋げて君と星月夜	主亡き犬の遠吠え寒北斗	分解の万年筆や蚯蚓鳴く	

1051 建ち並ぶ倉庫の向かう遠霧笛  
 1052 常闇の森に群がる月夜茸  
 1053 ほつほつと傘の咲きだす街時雨  
 1054 紫陽花になるまで絵具使ひけり  
 1055 冬ばらやドラマのやうな癌告知  
 1056 雪止んで永平寺さま雪卸す  
 1057 靴脱ぎて二人で走る運動会  
 1058 虫喰の穴に共布十三夜  
 1059 繕うてある蜘蛛の囲に朝日さす  
 1060 零余子採り夕餉楽しきことの増え  
 1061 放任の子のよく育ち榎櫃の実  
 1062 万緑や善意の杖の握り艶  
 1063 しらじらと通夜明けてゆく秋桜  
 1064 身の丈の暮し秋刀魚の二等分  
 1065 膝小僧さする勤労感謝の日  
 1066 接続詞置いて遠のく秋の雲  
 1067 息をころして梟も人間も  
 1068 千金の母の論しや夜の秋  
 1069 秋天に孫のブランコ富士揺らす  
 1070 囀や白き障子の向こう側  
 1071 冬うらら煮崩れしそうな地球あり  
 1072 灯火親し北斎漫画くりかへし  
 1073 老農のぎごちなき筆握りをり  
 1074 極楽は母の口癖干蒲団  
 1075 にんげんの消えゆく時間冬の虹  
 1076 刈田道匂い濃くなる雨上がり  
 1077 追ひかけて消えし手のあり盆踊  
 1078 青墨の淡きにじみや花の雨  
 1079 ドローン飛ぶ団塊の村青田波  
 1080 戦争に対峙すひまはり丈高し

1 0 8 1	豊年や紺腹掛に打つ太鼓
1 0 8 2	秋天や瀬戸物市のまねき猫
1 0 8 3	村芝居台詞問へて咳ひとつ
1 0 8 4	竜淵に潜む火の香の通り土間
1 0 8 5	麦の秋平和な国の平和な田
1 0 8 6	校庭の集合写真春の風
1 0 8 7	喪の客の蜜柑一盛り座を照らす
1 0 8 8	とまやにもカンナのひとつ咲きにけり
1 0 8 9	分数のやうにはいかずメロン切る
1 0 9 0	一仕事終えて麦茶の一気飲み
1 0 9 1	風鐸の久遠の響き北風
1 0 9 2	波郷忌や師影を辿る多摩樹林
1 0 9 3	共白髪懐メロ唄ふ炬燵かな
1 0 9 4	八十路なほ不器用に生き懐手
1 0 9 5	白雲の動画となるや秋の空
1 0 9 6	盆棚やなみなみと注ぐコップ酒
1 0 9 7	名月に宿る物影ありにけり
1 0 9 8	秋徽雨妣の歌集をひもとけり
1 0 9 9	なにくはぬ草の顔して飛蝗かな
1 1 0 0	炎帝と雷帝まみゆ昼下がり
1 1 0 1	冬ざれや晒す赤肌博打の木
1 1 0 2	宵宮の闇美しき大路かな
1 1 0 3	稽田や余生まだまだ楽しさう
1 1 0 4	苛められ逃れし畦の赤のまま
1 1 0 5	てっぺんが好きとジャングルジムの夏
1 1 0 6	上げ潮にあらがう大河雲の峰
1 1 0 7	秋高し助走のために退く一步
1 1 0 8	地下足袋の寡黙な男植木市
1 1 0 9	柿紅葉厩舎の牛に角あらず
1 1 1 0	色変へぬ松堂堂の男振り

1 1 1 1  
1 1 1 2  
1 1 1 3  
1 1 1 4  
1 1 1 5  
1 1 1 6  
1 1 1 7  
1 1 1 8  
1 1 1 9  
1 1 2 0  
1 1 2 1  
1 1 2 2  
1 1 2 3  
1 1 2 4  
1 1 2 5  
1 1 2 6  
1 1 2 7  
1 1 2 8  
1 1 2 9  
1 1 3 0  
1 1 3 1  
1 1 3 2  
1 1 3 3  
1 1 3 4  
1 1 3 5  
1 1 3 6  
1 1 3 7  
1 1 3 8  
1 1 3 9  
1 1 4 0

湖に風の跡あり初紅葉  
山の風海の風来ぬ藁ぼつち  
木の実落つ八十路の今日の空腹感  
秋晴れやマイナスイオンの高尾山  
十月の真澄の峰の濃かりけり  
諸鳥の修羅の啼き声そぞろ寒  
彼も又ユーチューバーか黒い蟻  
なれ寿司の臭味が指に本めくる  
前を真似手取り足取る踊かな  
万緑や岩湯に渡す木の枕  
歳時記に栞あまたや夏の果  
龍天に昇るやドレッシング分離  
恋文のひしめく文箱銀河濃し  
あふたびに「どなたでしたか」酔芙蓉  
黒よりも赤ペンの減る夜長かな  
端居してなほ凡に生き凡に生き  
川霧にぬれて流灯戻り来る  
冬早海へ返すといふ葬り  
着ぶくれて膝に重たき広辞苑  
胡麻叩く細き腕に風生れて  
後の月踵落としを二百回  
散らばりて残る玩具や金木犀  
群生といふさびしさに曼珠沙華  
戦ひの真つ只中を鳥渡る  
木洩れ陽にヒミツほぐれる木通かな  
海へ向く石仏ともし石路の花  
台風一過仮設道また獣道  
畳屋の来てゐる辺り野分晴  
秋桜ふとふるさとを歩きたく  
蚯蚓鳴く土にスコップ立ててあり

1170	初空や結べば鳩になる御籤
1169	露天湯の慈母となりたる良夜かな
1168	坑道の掘跡しるし小春風
1167	寂光に綿虫の死処なし
1166	送り出す夫へ弁当朝寒し
1165	秋蒔の畝に獣の足の跡
1164	晩菊や飾る金婚式の額
1163	舗装路の下は暗渠ぞ蚊食鳥
1162	ダッシュする長き階夏木立
1161	盆休み招き猫置く仏具店
1160	幻聴に礼言う母や秋ともし
1159	狛犬に杖立てかけて初詣
1158	起き抜けの足裏冷たき床捉ふ
1157	海渡る秋蝶君は農を継ぐ
1156	夕焼けに染まる少年農を継ぐ
1155	稽古笛ただよう闇の沈丁花
1154	鷹化して鳩と為りたる古稀の夫
1153	曼珠沙華太古の空の青さかな
1152	体内の水の澄みける魚族の裔
1151	静かの海に出づ中秋の水の星
1150	夜濯のしづくに星のひかり落つ
1149	蝌蚪生まる夜更け底なき沼を漕ぎ
1148	心音のたしかなる夜の雪ほたる
1147	手毬つき母は少女になりて跳ぶ
1146	山裾をグライダー発つ野菊かな
1145	この世をばしばらく空けし昼寢覚
1144	戦火くぐりし幼き日あり冬隣
1143	姉からも妹からも蓬餅
1142	立春やしばられ地蔵ゆるむ繩
1141	豪雨去り空気は凜と星月夜



1 1 7 1	つちふるや避難経路の人の型
1 1 7 2	さへづりの窓よかたちのよき耳よ
1 1 7 3	沫雪や一月経つて知る訃報
1 1 7 4	晶子の忌徴兵の無き国でよし
1 1 7 5	長崎の語り部若し夏帽子
1 1 7 6	十六夜や頬へまつげの影長く
1 1 7 7	検査着の糊の固さや冬ざるる
1 1 7 8	賀状書く佳きことひとつ付け加へ
1 1 7 9	うららけし人は生まれて土になる
1 1 8 0	眠り児の戦なき世のねむり草
1 1 8 1	言霊にまたも逃げらる雪解川
1 1 8 2	船を見に港まで行く十三夜
1 1 8 3	豊年の棚田を望み柩出す
1 1 8 4	梨剥いて螺旋になりて佳き日かな
1 1 8 5	毎日のありがたきかな君の声
1 1 8 6	戦禍避け早目に來たる渡り鳥
1 1 8 7	石鹼玉一瞬四囲を見渡せり
1 1 8 8	中年のハーレー煽る芋嵐
1 1 8 9	合歡の雨御陵と並ぶラブホテル
1 1 9 0	なおざりの仕事片付く鴟の声
1 1 9 1	奇怪なる星かと思ふ虫の秋
1 1 9 2	惑星の危機迫り來る草ひばり
1 1 9 3	命有る限り現役種子を蒔く
1 1 9 4	明易し大水青は湖に浮き
1 1 9 5	油照落し所が見付からず
1 1 9 6	洗濯機よく働いて秋日和
1 1 9 7	行秋や金箔透けし能衣裳
1 1 9 8	うつし世の月と遊ばむ翁舞
1 1 9 9	卒業や校歌に唱ふ豊後富士
1 2 0 0	夏雲に触れがら空きの観覧車

1 2 0 1  
1 2 0 2  
1 2 0 3  
1 2 0 4  
1 2 0 5  
1 2 0 6  
1 2 0 7  
1 2 0 8  
1 2 0 9  
1 2 1 0  
1 2 1 1  
1 2 1 2  
1 2 1 3  
1 2 1 4  
1 2 1 5  
1 2 1 6  
1 2 1 7  
1 2 1 8  
1 2 1 9  
1 2 2 0  
1 2 2 1  
1 2 2 2  
1 2 2 3  
1 2 2 4  
1 2 2 5  
1 2 2 6  
1 2 2 7  
1 2 2 8  
1 2 2 9  
1 2 3 0

水打つてきて追伸を一つ足す  
滝の音だけで日暮れて秋の山  
八雲立つ郷土謳はん柿の秋  
冬に入る舌のもつるる第九かな  
太陽がはるかにありてぶどう摘む  
旅に出て九月の雨を掌に受ける  
さきをゆく白蝶森の中に入る  
テーブルに夕刊ひろげ新茶汲む  
熱爛や女ながらにいける口  
大夕焼濁世なかなか捨て難し  
越の国稲穂の海の風の波  
曝書してわが半生を晒しをり  
空蟬や円周率を諳んじる  
残る者去りゆく者や蔓たぐる  
凍蝶の吸ひこぼしたる孤独かな  
みちのくの背骨跨ぎて去年今年  
やる気無い蟬の声聞き宿題す  
炎天や力餅買う峠駅  
たんぼ、や東北の忌と言ふ勿れ  
あんまりじゃないか夕立の後に死す  
マスクして人間嫌ひ粧ひぬ  
厨窓いとどの脚や富士を踏む  
炊き出しの空いちまひの末枯るる  
街なかに蟬の転がる昼下がり  
寒北斗別れを告げて駅を出る  
三高と呼ばれし夫と牛蒡掘る  
雪晴に太郎次郎の寢覚めかな  
石畳濡れて聖樹の明かりかな  
子爆弾を玩具にして八月の  
昔日の友かけぬけて去る枯葉

1 2 6 0	1 2 5 9	1 2 5 8	1 2 5 7	1 2 5 6	1 2 5 5	1 2 5 4	1 2 5 3	1 2 5 2	1 2 5 1	1 2 5 0	1 2 4 9	1 2 4 8	1 2 4 7	1 2 4 6	1 2 4 5	1 2 4 4	1 2 4 3	1 2 4 2	1 2 4 1	1 2 4 0	1 2 3 9	1 2 3 8	1 2 3 7	1 2 3 6	1 2 3 5	1 2 3 4	1 2 3 3	1 2 3 2	1 2 3 1
クレヨン	伊能	天へ	みどり	襖	母の	僅かな	蚊の	吹雪	腕の	東京	うす	貫一	深海	丸い	順に	八月	迎え	かな	春航	マス	終戦	字を	斑鳩	こぼ	熊蟬	音割	盆休	六甲	終戦
の暑	能図	地へ	りご	絵の	の日	かな	の声	の夜	の底	は好	すき	も下	海鼠	石ひ	に名	月十	火や	ぶん	カッ	忌短	を識	の古	ぼる	や弾	割る	み盲	甲も	日御	
中見	の未	へ伸	を白	の山	や息	なる	す核	雪が	黒く	好き	もの	も下	の海	ひとつ	をは	五日	や君	んや	ト昨	忌短	りて	の古	るに	や弾	る防	み盲	も飛	所拔	
舞い	踏地	びて	寿の	へ朝	子の	畑を	争を	雪打	く光	かと	めく	も下	鼠水	つと	つき	日盗	の選	核の	夜雨	わが	墳芒	にま	や弾	る防	み盲	も飛	所拔		
い仏	広し	立夏	腕へ	の日	の開	受け	を語	ち叩	らせ	聞か	つて	も下	より	つかる	り呼	墨の	んだ	話を	母今	の立	かす	や弾	る防	み盲	も飛	所拔			
壇に	秋茜	の心	冬月	夏休	く長	継ぎ	るとき	く音	せ秋	かれ	あを	も下	透	涼み	ぶ師	土埃	服ば	を切	宵卒	ち上	水揚	や弾	る防	み盲	も飛	所拔			
置く		柱		み	財布	鋏始			澄め	盆踊	き春	も下	明に	かな	卒業		ばかり	りあ	業す	がる	げ鱒	や弾	る防	み盲	も飛	所拔			
											の空							ぐる	な	かな	かな	なほ	なほ						

1 2 6 1  
1 2 6 2  
1 2 6 3  
1 2 6 4  
1 2 6 5  
1 2 6 6  
1 2 6 7  
1 2 6 8  
1 2 6 9  
1 2 7 0  
1 2 7 1  
1 2 7 2  
1 2 7 3  
1 2 7 4  
1 2 7 5  
1 2 7 6  
1 2 7 7  
1 2 7 8  
1 2 7 9  
1 2 8 0  
1 2 8 1  
1 2 8 2  
1 2 8 3  
1 2 8 4  
1 2 8 5  
1 2 8 6  
1 2 8 7  
1 2 8 8  
1 2 8 9  
1 2 9 0

紅花をつくづく抱き卒寿越す  
知床の海深々と春未だ  
ガンジーの如き案山子に乗る鳥  
セザンヌの青空へ溶けシャボン玉  
秒針が刻み込む夏テレワーク  
夏休み空がだんだん広くなる  
余花の町遺族年金更新す  
傷心の地球を包む今日の月  
女王の金貨こつんと落つ白露  
子の嘘の数は数えぬ萩の花  
夫徘徊まづはひまはり畑まで  
啼泣の合間のごはん梅日和  
雪晴れてハーフパイプの空に舞う  
夕立に打たれて涼し貴船川  
村時雨合羽の重み枷になる  
梨食えば鳥取砂丘に風が舞う  
吾の名を忘れし父の盆踊  
春曉にコタンの灯り薄れけり  
降る雪や昭和は祖母の皺にあり  
無期の子の祈り聖夜を潤ませて  
厨事労ふやうに虫の声  
かくれんぼの鬼つれ帰る秋の暮  
露霜をひと撫で尾瀬の朝日かな  
とんぼうのぎゆるんと風へ戻りけり  
敗戦の日や七歳の父の靴  
手のひらに蟬を隠して父帰る  
駆くる子に世界は広し捕虫網  
抱へたる納屋の藁より蛍かな  
立秋の檻にかがやく鳥の綺羅  
くうと鳴く檻のおほとり終戦日

1 2 9 1	給食の余りも食つて天高し
1 2 9 2	潮騒や防風林のハンモック
1 2 9 3	長き夜やニュースの後の独り言
1 2 9 4	奥湯への道は薄の九十九折
1 2 9 5	をちここに鳥弾ませて花の雲
1 2 9 6	薫風や老人会の初舞台
1 2 9 7	引き潮に鯉のまた飛び日の暮るる
1 2 9 8	囀や寺の階段立ち止まる
1 2 9 9	爽やかや待ち人の読む文庫本
1 3 0 0	ハロウインの群に一人の美少年
1 3 0 1	タマ狩りし居間のセミ鳴き妻も泣き
1 3 0 2	夕焼のあとの指切いくたびぞ
1 3 0 3	妻亡くば余生詮なし虫の夜
1 3 0 4	鳴き止みて森深くなり虫の秋
1 3 0 5	上下の句を分け持ちて秘め扇
1 3 0 6	朝刊にわが名小さく鴟高音
1 3 0 7	銀杏を踏んで乗り込む夜行バス
1 3 0 8	蓼の花牛の鼻輪の綱を解く
1 3 0 9	あたたかやじいじよりじじいがいいなあ
1 3 1 0	白桃の香に美しきびだく音
1 3 1 1	四次元を光纏ひて雪しづか
1 3 1 2	風邪よりもひとが怖くてマスクする
1 3 1 3	菜の花や翅の力の抜きどころ
1 3 1 4	チカチカと「きぼう」通過す十三夜
1 3 1 5	天と地に百羽百態鳥の恋
1 3 1 6	背泳やひとりひひとりづつの空
1 3 1 7	異世界に転生したい春の夢
1 3 1 8	卯の花や夕陽に染まる一軒家
1 3 1 9	秋灯や街の死角をかがよへる
1 3 2 0	いつぼんの空のきれいな秋の川

1 3 2 1  
1 3 2 2  
1 3 2 3  
1 3 2 4  
1 3 2 5  
1 3 2 6  
1 3 2 7  
1 3 2 8  
1 3 2 9  
1 3 3 0  
1 3 3 1  
1 3 3 2  
1 3 3 3  
1 3 3 4  
1 3 3 5  
1 3 3 6  
1 3 3 7  
1 3 3 8  
1 3 3 9  
1 3 4 0  
1 3 4 1  
1 3 4 2  
1 3 4 3  
1 3 4 4  
1 3 4 5  
1 3 4 6  
1 3 4 7  
1 3 4 8  
1 3 4 9  
1 3 5 0

ふるさとを腰で感じて葱をぬく  
ゆふぐれのシャツター街を夏の蝶  
てのひらに産着をたたむ春の昼  
線状降水帯青林檎齧る  
今わかる母の気遣い桜餅  
八の字にカーテン開く花の頃  
亡き母に良き知らせあり盆の夕  
乙姫となれり闇夜の熱帯魚  
白シャツ捲り一番人気のAランチ  
咲き揃ふ光の窓のヒヤシンス  
山鳩にほうほと呼ばれ木染月  
さみしさは無色透明秋刀魚食ぶ  
乗り継ぎて窓に一眸麦の秋  
月さすや文字盤大き時計まで  
颱風や木魚を叩く音速き  
八月の折り鶴一羽傾けり  
頑固さは母ゆずりらし青檸檬  
掌に残る吾子の重みよ青林檎  
鳥渡るルビを振られしメニユーかな  
ひぐらしの声におぼれるまで遊び  
退屈な指先午後のソーダ水  
風鈴や鱗のように音は剝がれ  
連打連打三年待ちし祭太鼓  
囀や我も真似してさへづりぬ  
万緑や水満満と手水鉢  
露草や星屑落ちてゐる夜明け  
卒婚のLDKのどかかな  
爆音に生まるるいのち犬ふぐり  
楠の実を玉に鉄砲射ちし日も  
昼の月接骨院のがいこつと

1380	1379	1378	1377	1376	1375	1374	1373	1372	1371	1370	1369	1368	1367	1366	1365	1364	1363	1362	1361	1360	1359	1358	1357	1356	1355	1354	1353	1352	1351
レース編む淡き交はり偲びつつ	ガード下のコリアンタウン後の月	元夫といふ名の他人鳥帰る	秋時雨思ひ定めて傘開く	鯰起し子が東京へ行くと言う	をちここに牛放りゐたる虚子忌かな	火葬場の裏口にねこ夜半の秋	秋晴れやあくび一度のいのち在り	爪先はさみしさの果半仙戯	踊の輪抜けきて手足淋しかり	虫干しや写真の裏に戦地の句	刈り終へて明るき谷戸の三枚田	薄氷の吹かれて水の蒼さかな	青天をひよいと乗せたる白日傘	花野道阿蘇の寝釈迦の腰あたり	暗闇の深き辺りが花野らし	大仏の胎内にゐて愁思濃し	逆上がりようやくできて秋夕焼	爽やかに胸張り女子の鼓笛隊	青大将顎を外して卵呑む	虚空へと香りを放つ金木犀	この星に硝煙絶えず開戦日	大宮をゆつくり歩く熊手かな	カッターの刃を折る音の露けしや	海風の染み込む街や盆休み	倒木の洞の黒土涼新た	標本の虫に番号原爆忌	鍵盤に十指を使い切る秋思	冬立つや喪中はがきの試し刷り	黄昏の物干し台に蜻蛉と

1 3 8 1 港江の生絹の色の水母かな  
 1 3 8 2 独り居に煙も旨し秋刀魚焼く  
 1 3 8 3 日記買ふ変りなきこと書くために  
 1 3 8 4 セロ弾きのゴーシユ子と読む良夜かな  
 1 3 8 5 爽やかや音楽フェスの城下町  
 1 3 8 6 映画館次つき閉ぢて街に冬  
 1 3 8 7 百日紅百日空を使いきる  
 1 3 8 8 昼の虫二人の距離を鳴き分くる  
 1 3 8 9 満を持すシテの仕舞や竹の春  
 1 3 9 0 妻が逝く黄泉路に咲くや曼珠沙華  
 1 3 9 1 試歩の朝空ひろびろとあの木に芽  
 1 3 9 2 泥ふかく空ふかく搔く代田かな  
 1 3 9 3 軋みては二百十日の風見鶏  
 1 3 9 4 田起しや声を投げ合ふ老夫婦  
 1 3 9 5 赤茶けし旅行鞆や終戦日  
 1 3 9 6 日時計の計りかねたる冬日かな  
 1 3 9 7 懐手して星々を品定め  
 1 3 9 8 仲見世を会釈なじみのパナマ帽  
 1 3 9 9 小指にはペディキュア残る夏期講習  
 1 4 0 0 蕨狩り見える人には見えている  
 1 4 0 1 初夢に心当たりのなき一人  
 1 4 0 2 夜映す水面の桜揺らす鯉  
 1 4 0 3 愛鳥日背面跳びの掴む空  
 1 4 0 4 軽き君支えて歩む春を待つ  
 1 4 0 5 先頭はおさげ髪なり飛蝗捕り  
 1 4 0 6 月光の立て掛けてあり母の杖  
 1 4 0 7 旅終へるやう退院す鱗雲  
 1 4 0 8 ケアマネが父の客なり花八手  
 1 4 0 9 聖書積む学内書店鳥の恋  
 1 4 1 0 ブリキの猿歯をむいてゐる西日かな



1 4 1 1  
1 4 1 2  
1 4 1 3  
1 4 1 4  
1 4 1 5  
1 4 1 6  
1 4 1 7  
1 4 1 8  
1 4 1 9  
1 4 2 0  
1 4 2 1  
1 4 2 2  
1 4 2 3  
1 4 2 4  
1 4 2 5  
1 4 2 6  
1 4 2 7  
1 4 2 8  
1 4 2 9  
1 4 3 0  
1 4 3 1  
1 4 3 2  
1 4 3 3  
1 4 3 4  
1 4 3 5  
1 4 3 6  
1 4 3 7  
1 4 3 8  
1 4 3 9  
1 4 4 0

幸せと妻を言わせる岩清水  
鷹渡る空の高さを見てゐたり  
雨よりも雨音にある秋思かな  
砂日傘吾子追ふ母の双眼鏡  
終戦日シベリア時代語る父  
冷凍彼女なま身となりぬ春の夢  
枝豆の指で覚えし塩加減  
Uターン決めし友へと林檎剝く  
生業を変へしはらから十三夜  
靴の消えて母の手やはらかし  
一葉忌櫛の通りのきしきしと  
「お疲れ」と産後の頬に青蜜柑  
海の日やプラスチックを呑む魚  
コスモスを散らし戦鬪ごつこの子  
外は秋の野青春の歌生まる  
父に会うた母にも会うた昼寢覚  
秋澄むや原爆ドーム越しの空  
ひと部屋を灯して盆の支度かな  
下戸の夫上戸の妻や今年酒  
砲弾の無数の穴よ蟬生まる  
病棟に鍵音のこる残暑かな  
銃持つかもたぬか日本小鳥来る  
起きてまづ一杯の水小鳥来る  
手話といふ涼しき声のふたりかな  
戦塵にかたぶく地軸草の花  
年の夜やこの星にまた生まれたし  
遍路杖この期に及び野望あり  
一艘は邪馬台国へ精霊火  
人間の眼の美しく冬に入る  
ふるさとの炬燵は母の胎のやう

1 4 4 1  
1 4 4 2  
1 4 4 3  
1 4 4 4  
1 4 4 5  
1 4 4 6  
1 4 4 7  
1 4 4 8  
1 4 4 9  
1 4 5 0  
1 4 5 1  
1 4 5 2  
1 4 5 3  
1 4 5 4  
1 4 5 5  
1 4 5 6  
1 4 5 7  
1 4 5 8  
1 4 5 9  
1 4 6 0  
1 4 6 1  
1 4 6 2  
1 4 6 3  
1 4 6 4  
1 4 6 5  
1 4 6 6  
1 4 6 7  
1 4 6 8  
1 4 6 9  
1 4 7 0

戻り梅雨検査結果を待つ廊下  
乳牛の乳房の怒張豊の秋  
ハモニカの少女笑えば山笑う  
バラの香に執して鼻を刺れけり  
黄身のせてローストビーフ井や春  
百合咲くや盲導犬の長き舌  
研ぎ汁の白さも清し今年米  
寒明や伸びする猫の尻高く  
囀のソプラノ川の瀬のアルト  
低気圧停滞壁に竈馬  
安達太良の空に溶けゆく秋の雲  
菅貫を跨げば杜の大庇  
水打つて車夫は一服雷門  
手花火の垂れ玉水に落ちる音  
白波の寄せ来る三保の松手入れ  
花水木方程式に影を置く  
雪を搔く今朝新聞の届く道  
産声のひとりひと色チューリップ  
Tシャツに軽くアイロン出勤日  
退官の夫ねぎらはむ桜鯛  
新米を抱へて来たり恵比寿顔  
一線をさまよふ議論扇風機  
住宅ローン完済したる帰省かな  
鶴来る父の表札外す日の  
ふらここや少女の残す夕間暮  
口を衝く上方ことば冬うらら  
家系図をなぞる指さき冬ぬくし  
墨塗りしその日が母の終戦記念日  
太棹と五座の名残りや宵の月  
いもうとの嫁ぐ日近き金魚かな

1 4 7 1  
1 4 7 2  
1 4 7 3  
1 4 7 4  
1 4 7 5  
1 4 7 6  
1 4 7 7  
1 4 7 8  
1 4 7 9  
1 4 8 0  
1 4 8 1  
1 4 8 2  
1 4 8 3  
1 4 8 4  
1 4 8 5  
1 4 8 6  
1 4 8 7  
1 4 8 8  
1 4 8 9  
1 4 9 0  
1 4 9 1  
1 4 9 2  
1 4 9 3  
1 4 9 4  
1 4 9 5  
1 4 9 6  
1 4 9 7  
1 4 9 8  
1 4 9 9  
1 5 0 0

作るなり句を捨ててゆく涼しさよ  
紙に文字書かぬ日もあり桃の花  
靴磨き上げたり二百十日なり  
春宵や指揮者は雲を掴み出す  
魚臭無き港の口や鬼薊  
冬の灯やモデルハウスの仮の街  
水ぎはに兵と書く浜沖縄忌  
花嫁のドレス賀状の外までも  
弓ひきて精霊ばつた風に乗る  
テレワークなれば胡座にちゃんちゃんこ  
解体の木造駅舎秋燕  
木枯らしへ一直線に只見線  
只見線再開の日や小鳥来る  
山城の土塁の名残すみれ草  
人日の天に起重機伸びきつて  
番付を貼られ盃の金魚かな  
棕櫚縄の黒引き締めり冬構  
ゆるゆらりゴーヤカーテン空へ飛べ  
凹ませる腹や聖夜の合唱団  
風邪ひとつひかない身体去年今年  
鳥取の空の滴の梨を食む  
立て看の失せしキャンパス二月尽  
墓守りの責の重さよ秋裕  
名をもらひ家猫となり炬燵中  
探梅の探鳥会と行き合へり  
紫蘇の実をしごくデモには遠くゐて  
春の日に祖母の句帳を虫干しす  
柚子実る父母亡き跡の家に住む  
新涼や最後の授乳書き留める  
和菓子屋の壁の古地図や開戦日

1501  
1502  
1503  
1504  
1505  
1506  
1507  
1508  
1509  
1510  
1511  
1512  
1513  
1514  
1515  
1516  
1517  
1518  
1519  
1520  
1521  
1522  
1523  
1524  
1525  
1526  
1527  
1528  
1529  
1530

爽やかや市場すぎゆく水素バス  
初梨や白いテーブル白い皿  
秋日和卒寿の母を微笑ます  
栗飯に揃いの茶碗新調し  
梅雨明けや大樹に一つ小鳥鳴く  
アラム止め猫と二度寝の夏季休暇  
卒業子机の傷をなぞりけり  
柿の実のたわわに他愛ない話  
父逝くや墓石の肩の雨蛙  
春まけて大地歪ませゆく散歩  
逝きしこと知らぬ電話や花のころ  
リハビリの先生に聞く里桜  
田草取りわがうねばかり生えており  
踏まれても刈られてもなほ草の花  
立葵背筋伸びたる指差喚呼  
戦前は後から気づく寒卵  
餡パンの臍にただしき文化の日  
冬近し今日は自然に手を繋ぐ  
最後かと思へど無口盆帰省  
弔問の暮れきらぬ空初桜  
国境を越えしリュックに藍浴衣  
秋雨の跡の乾きし葉書かな  
雪代山女火箸のごとき人の手に  
母笑むや立体絵はがきの花見  
夜更しの子と夜更しや雪明り  
生真目な立ち姿にて土筆かな  
足らぬもの二つ三つあり盆用意  
母に会ふためのふるさと冬桜  
吾には吾の母には母の桜かな  
百千鳥森の羽ばたきそうな朝

1 5 3 1  
1 5 3 2  
1 5 3 3  
1 5 3 4  
1 5 3 5  
1 5 3 6  
1 5 3 7  
1 5 3 8  
1 5 3 9  
1 5 4 0  
1 5 4 1  
1 5 4 2  
1 5 4 3  
1 5 4 4  
1 5 4 5  
1 5 4 6  
1 5 4 7  
1 5 4 8  
1 5 4 9  
1 5 5 0  
1 5 5 1  
1 5 5 2  
1 5 5 3  
1 5 5 4  
1 5 5 5  
1 5 5 6  
1 5 5 7  
1 5 5 8  
1 5 5 9  
1 5 6 0

みちのくの温き鉱泉夏の星  
球擱めラガーがラガー持ち上げぬ  
解体工立ちて屋根の上夏の雲  
着信を未だ待つてをり神無月  
稲妻やスカイツリーに心柱  
窓に月内科病棟談話室  
秋空に包まれてゆく昼休み  
初雪や紺の釦に白が載る  
秋晴や邑を養ふ山しづか  
紙繰つて指紋磨り減る夜業かな  
ジャグラーのボール投げ上ぐ小春かな  
校庭に砲丸ひとつ山に雪  
賢治忌や星へつながる夜汽車の灯  
猫の尾の時折ゆれて小春かな  
昆布出汁にほふホームや浪花秋  
この星の地軸撓めて林檎挽ぐ一  
初大師たちまち雪の日なりけり  
客船の引き波豊か春隣  
秋冷やしづかに朽ちる聖火台  
遥かなる富士を望みつ蒲団干す  
消毒の指ひりひりと年用意  
船室を占めハロウインの大南瓜  
跳箱の六段重ね雁わたる  
天気図の色うすくなる寒露の日  
本棚にハウツーならべ太閤忌  
立ち込める古本の香や秋深し  
寒椿旅の終わりは樹木葬  
乗換のたびマフラーを巻き直す  
日を選びマスクの色を変へて出る  
この窓に始まる暮らし牽牛花

祀られて踏絵陰翳なほ深し 1561  
 去年今年列車カチンの森を過ぐ 1562  
 鱒酒の火に女の手ついと引く 1563  
 浅草に言葉いろいろ天高し 1564  
 稲架掛けの背に山陰迫りをり 1565  
 鬼灯をあげるよ君は悪くない 1566  
 生家より今年限りの今年米 1567  
 ハロウインの日鼻淋しき南瓜かな 1568  
 おたがひをさけあふやうに落椿 1569  
 初紅葉東京・芝の七曲がり 1570  
 春分や小雨の後にまた小雨 1571  
 喘息の胸にも律の調べかな 1572  
 ささくれた心にしみる黒葡萄 1573  
 青き踏むよく似た顔のかしましく 1574  
 天窓の明るきヒュッテ月今宵 1575  
 敗荷や城主は鴉やも知れぬ 1576  
 草野球見る自転車籠に葱 1577  
 腕捲り空振りばかり金魚釣り 1578  
 若き日のあなたを思ふ檸檬かな 1579  
 深く踏むピアノのペダル春の闇 1580  
 遠泳や身ぬちの星をこぼしつつ 1581  
 御神籤に鬼の絵のある月の寺 1582  
 一番星コスモスなべて影絵へと 1583  
 綿虫や庚申塚に明治の記 1584  
 東京駅アナウンスごと冬に入る 1585  
 山清水汲みて今夜はカレーかな 1586  
 校歌もうお風呂で披露入学子 1587  
 七夕や世界の平和こいねがう (点字) 1588  
 ひなまつり窓の外には銀世界 (点字) 1589  
 登りたき山々ながめ年おしむ (点字) 1590

1 5 9 1 手に触れし布の温もり吊しびな (点字)  
 1 5 9 2 春の夢ブラックホールの縁めぐる (点字)  
 1 5 9 3 夏は来ぬネオンテトラの身の早さ (点字)  
 1 5 9 4 おだやかな一日となりぬ緑の日 (点字)  
 1 5 9 5 雷鳴に一呼吸あり滝の雨 (点字)  
 1 5 9 6 帰省せぬ子等の近況聞く電話 (点字)  
 1 5 9 7 梅雨はれまチャグチャグ馬っこ子がねむる (点字)  
 1 5 9 8 青空に二人ブランコ空せまる (点字)  
 1 5 9 9 帰れないビルの谷間の冬の月 (点字)  
 1 6 0 0 待ちわびし私の出番福寿草 (点字)  
 1 6 0 1 そこそこの幸せねがう初詣 (点字)  
 1 6 0 2 バス停が杖に触れざる深雪かな (点字)  
 1 6 0 3 しんしんとただしんしんと雪が降る (点字)  
 1 6 0 4 春彼岸雪をふみしめ墓まいり (点字)  
 1 6 0 5 うなぎ届きカレンダー見れば父の日か (点字)  
 1 6 0 6 爽やかや妻に詣でて経を読む (点字)  
 1 6 0 7 何ごとも程々に生き半夏生 (点字)  
 1 6 0 8 鳥渡る戦争も国境も知らず (点字)  
 1 6 0 9 峰雲の裾つかまへてゐる水平線 (点字)  
 1 6 1 0 鹿鳴くや旅の源泉かけ流し (点字)  
 1 6 1 1 夏草や猫の額の光合成 (点字)  
 1 6 1 2 日の出より劫火のごとく秋彼岸 (点字)  
 1 6 1 3 大旦那間が死語となる未来 (点字)  
 1 6 1 4 さてと顔あげれば釣瓶落しかな (点字)  
 1 6 1 5 ぷっくりと柔らかき手や水温む (点字)  
 1 6 1 6 扇子閉じ開きパワーハラスメント (点字)  
 1 6 1 7 大人より大人な幼な秋澄める (点字)  
 1 6 1 8 オノマトペいろいろ湧くや虫時雨 (点字)  
 1 6 1 9 木犀の金か銀かを嗅ぎわけて (点字)  
 1 6 2 0 点毎にまち国せかい教えられ (点字)

1 6 2 1	里の道姉と片蔭求めつつ (点字)
1 6 2 2	涼風に食欲が増し誕生日 (点字)
1 6 2 3	空気澄むくちびるで読む点字本 (点字)
1 6 2 4	天高し点字毎日文化賞 (点字)
1 6 2 5	蜆汁うまし松江は今朝も晴れ (点字)
1 6 2 6	故郷の様変わりせし秋思かな (点字)
1 6 2 7	糸とんぼ時刻表なき渡し舟
1 6 2 8	冗談にそ知らぬ顔や秋の猫
1 6 2 9	台風の渦引きし後秋実る
1 6 3 0	子供らの声重なりし落葉搔
1 6 3 1	雪ばんば新幹線がまだ来ない
1 6 3 2	帰省子を千枚漬けと父が待つ
1 6 3 3	夕涼や妻へ胎児へ童話読む
1 6 3 4	スチームの金属音や朝の会
1 6 3 5	子海豚の片眼で眠る星月夜
1 6 3 6	葉桜や彫刻刀の指の傷
1 6 3 7	マスクして争ふ星となりたるか